

# 上曾根遺跡

## 第2次発掘調査報告書

1989

山形県  
山形県教育委員会

かみ そ ね  
上 曾 根 遺 跡  
第 2 次 発 掘 調 査 報 告 書

平成元年3月

山 形 県  
山形県教育委員会

# 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和63年度に実施した、酒田市上曾根遺跡の緊急発掘調査の結果をまとめたものです。

近年開発事業の進展に伴い、地下に埋もれた埋蔵文化財との関わりも増加する傾向にあります。県経済と県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の文化遺産である埋蔵文化財との間には、困難な問題も山積の状況がありますが、生活文化の向上とする同一の立場から調整を行い、今後とも埋蔵文化財保護のために努力を続けてまいる所存であります。

終わりに本調査に御協力を賜りました関係各位、並びに地元の方々に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対するおおかたの理解の一助となれば幸いです。

平成元年3月

山形県教育委員会

教育長 木場 清耕

## 例　　言

- 1 本書は、山形県教育委員会が山形県建設部の委託を受けて、昭和63年度に実施した、県道酒田・遊佐線道路改良事業に係る上曾根遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、山形県酒田市大字上野曾根字上中割45である。
- 3 発掘調査は昭和63年5月23日～7月1日までの延29日間実施した。
- 4 調査体制は、下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治

現場主任 斎藤 主税

調査員 渋谷 孝雄

同 井上 穀

事務局事務局長 後藤 茂彌

事務局長補佐 土門 紹穂

事務局員 佐藤 大治

長谷部恵子

長谷川 浩

高橋 春雄

- 5 調査については、酒田市教育委員会・庄内支庁建設部道路計画課・庄内教育事務所の関係機関、並びに地元上曾根地区・庭田地区・城輪地区・安田地区の方々の御協力を得た。

ここに記して感謝申し上げる。

- 6 本報告書の作成については、斎藤主税・井上穀・加藤一が担当し、挿図・表・図版の作成については、阿部正子・生田博子・開沼美紀・柴崎マリ子・大滝栄子・西村郁子・鈴木邦子・三浦節子がこれを補佐した。

- 7 本書の編集は、阿部明彦・斎藤主税が担当し、全体は佐々木洋治が総括した。

- 8 曲物の年代については光谷拓実氏（国立奈良文化財研究所）の御教示を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

- 9 出土遺物その他、調査にかかる記録類は一括して山形県教育委員会が保管している。

## 凡 例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

S B……建物跡	S E……井戸跡	S K……土壤	S D……溝跡
E B……柱穴	E P……小穴	S M……塙	G……グリッド
- 2 遺構番号は基本的に現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲している。
- 3 遺物に付した記号は、R P（土器・土製品）、RW（木製品）、R Q（石製品）であり、遺構内での検出順にしたがって番号を付した。
- 4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
  - (1) 遺跡全体図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
  - (2) 建物跡の主軸方向は、南北棟を桁行で、東西棟を梁行で測定した。
  - (3) 遺構実測図は、1/20・1/40他の縮図で探録し、各挿図毎にスケールを付した。
  - (4) 遺物実測図・拓影図・遺物図版は原則的に1/3・1/4で探録し、実測図については各々にスケールを付した。
  - (5) 土器実測図、拓影図の断面では白抜きが土師器・赤焼土器を、黒塗りは須恵器を表している。
  - (6) 土師器実測図の内外面のスクリーン・トーンは黒色処理を表している。
  - (7) 遺物観察表中の計測値欄で、( )内の数値は図上復元による推計値を示している。
  - (8) 本書中の遺物番号は、遺構毎に各1番から付した。

## 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至るまでの経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の立地と自然環境	3
2 歴史的環境	3
III 遺跡の概観	
1 層序の概要	5
2 遺構の分布	5
IV 遺構と遺物	
1 掘立柱建物跡	9
2 井戸跡	11
3 井戸跡出土遺物	17
4 土壙	23
5 土壙出土遺物	30
6 柱穴	34
7 塚	36
8 遺構外出土遺物	37
V まとめ	43

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡全体図	4
第3図 グリッド配置図・A調査区	6
第4図 遺跡層序	7・8
第5図 遺構分布図	7・8
第6図 S B 1 建物跡	10
第7図 S B 2 建物跡	12
第8図 S E 1 井戸跡	13
第9図 S E 7 井戸跡	14
第10図 S E 8 井戸跡	15
第11図 S E 41 井戸跡	17
第12図 S E 97 井戸跡	18
第13図 S E 97 井戸跡	19
第14図 井戸跡出土遺物(1)	21

第15図	井戸跡出土遺物(2).....	22	第23図	土壤出土遺物(1).....	31
第16図	S K 2 土壤.....	23	第24図	土壤出土遺物(2).....	32
第17図	S K 3 土壤.....	24	第25図	土壤出土遺物(3).....	33
第18図	S K 4 土壤.....	25	第26図	柱穴(1).....	35
第19図	S K 5 土壤.....	26	第27図	柱穴(2).....	36
第20図	S K37・40土壤.....	27	第28図	遺構外出土遺物(1).....	37
第21図	S K56土壤.....	28	第29図	遺構外出土遺物(2).....	38
第22図	S K78土壤.....	29	第30図	S K 1 塚.....	39・40

## 図 版 目 次

図版 1	遺跡近景	図版16	S K 5 土壤
図版 2	A・B調査区	図版17	S K 5 土壤
図版 3	調査風景・B区遺構検出状況	図版18	S K37・S K56土壤
図版 4	S B 1・S B 2 建物跡	図版19	S K56・S K78土壤
図版 5	E B 9・16・25・39・43	図版20	S K78土壤
図版 6	S E 1 井戸跡	図版21	S K78・E P30・32・57
図版 7	S E 7 井戸跡	図版22	E P10・14・58・59・100・101
図版 8	S E 7・S E 8 井戸跡	図版23	E P13・18・48・104・S M 1 塚
図版 9	S E 8・S E 41 井戸跡	図版24	S M 1 塚下層遺構検出状態
図版10	S E 41 井戸跡	図版25	S M 1 塚下層・A調査区
図版11	S E 97 井戸跡	図版26	出土遺物(1)
図版12	S E 97 井戸跡・S K 2 土壤	図版27	出土遺物(2)
図版13	S K 2・S K 3 土壤	図版28	出土遺物(3)
図版14	S K 3・S K 4 土壤	図版29	出土遺物(4)
図版15	S K 4 土壤	図版30	出土遺物(5)

## 表

表一 1	遺物観察表.....	41
表一 2	遺物観察表.....	42

# I 調査の経緯

## 1 調査に至るまでの経過

山形県酒田市には、国指定史跡「城輪柵跡」をはじめ数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が分布している。時期的には平安時代を主体とするものが多いが、近年の調査では弥生時代から中世に関する遺跡も発見されており、新しい資料の発見も期待される地域である。

酒田市にある上野曾根地区では、昭和61年度農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）が計画されることになり、山形県教育委員会では、遺跡保存と事業計画との調整を図るために昭和60年に分布調査を行った。その結果、計画区域内に「上曾根遺跡」が係ることが確認されたため県教委が主体となり、昭和61年7月9日～9月26日まで第1次調査として緊急発掘調査を実施した。調査の結果、平安時代～近世までの遺構と遺物が多数検出され注目を集めた。

また、昭和63年度にこの遺跡内において県道酒田～遊佐線道路改良事業が行われることになり、庄内支庁建設部道路計画課・酒田市教育委員会・県教委など関連機関による協議を行った結果、県教委が主体となり、昭和63年5月23日～7月1日まで緊急発掘調査を上曾根遺跡第2次調査として実行するはこびとなったものである。

## 2 調査の経過

調査は、まず調査区を包み込むように、 $3 \times 3\text{ m}$ を1単位とするグリッドを設定した。基準線は、道路建設予定地のセンター杭NO.155～156杭のラインに合わせてX軸とし、Y軸はそれに直交する方向に設定した。

次に、遺跡内の遺構・遺物の集中地域を探るため、同杭のライン上に $1 \times 9\text{ m}$ のトレーナーを9m間隔で設定し掘り下げた。その結果、調査区域内の南西側において多量の土器片等の遺物が発見され、北東側においても若干ではあるが土器片が出土した。これを基に2ヶ所の重機拡張区域を設定し、北東側をA区、南西側をB区と区分を行い、遺物の多いB区から掘り進めていった。

その後、各区毎に手堀りによる面精査に移り、掘り下げ・面削りを重ね遺構・遺物の検出及びその広がりの把握を行った。その結果、A区では東側に土器片がわずかながら検出された他は、遺構等は検出されなかった。B区では遺構・遺物が比較的多数確認された。このため、B区を中心に精査を行うことにした。検出された遺構は、平面プラン確認後覆土を半段して掘り下げ、壁の掘り込み状態及び土層の観察、記録等を実施した。出土遺物は遺構毎あるいはグリッド毎に取り上げた。調査後半は、写真撮影・平面実測・レベリング等を行い調査全日程を終了した。



1	上 草 原 地 區	11	平 原 地 區	21	旱 原 地 區
2	山 地 區	12	半 山 地 區	22	半 旱 原 地 區
3	山 地 區	13	半 山 地 區	23	半 旱 原 地 區
4	東 北 日 照 帶	14	半 山 地 區	24	半 旱 原 地 區
5	東 北 日 照 帶	15	半 山 地 區	25	半 旱 原 地 區
6	東 北 日 照 帶	16	半 山 地 區	26	半 旱 原 地 區
7	東 北 日 照 帶	17	半 山 地 區	27	半 旱 原 地 區
8	小 不 規 則 地 形 區	18	半 山 地 區	28	半 旱 原 地 區
9	階 梯 成 中 高 地 形	19	半 山 地 區	29	半 旱 原 地 區
10	東 北 日 照 帶	20	本 山 地 區	30	半 旱 原 地 區

第1図 遺跡位置図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の立地と自然環境

中央を東西に最上川が流れる庄内平野は、日本でも有数の穀倉地帯であるが、その中でも飽海地方と呼ばれる北半部はことに肥沃な土地である。この飽海地方の地形は大別して東側の出羽丘陵地域と西側の庄内北部平野地域に区分される。平野地域はさらに東から、庄内北部河間低地、酒田北部三角洲、庄内北部砂丘の3つに細分される。庄内北部河間低地はさらに自然堤防・後背湿地・狭義の河間低地を含んでいる。

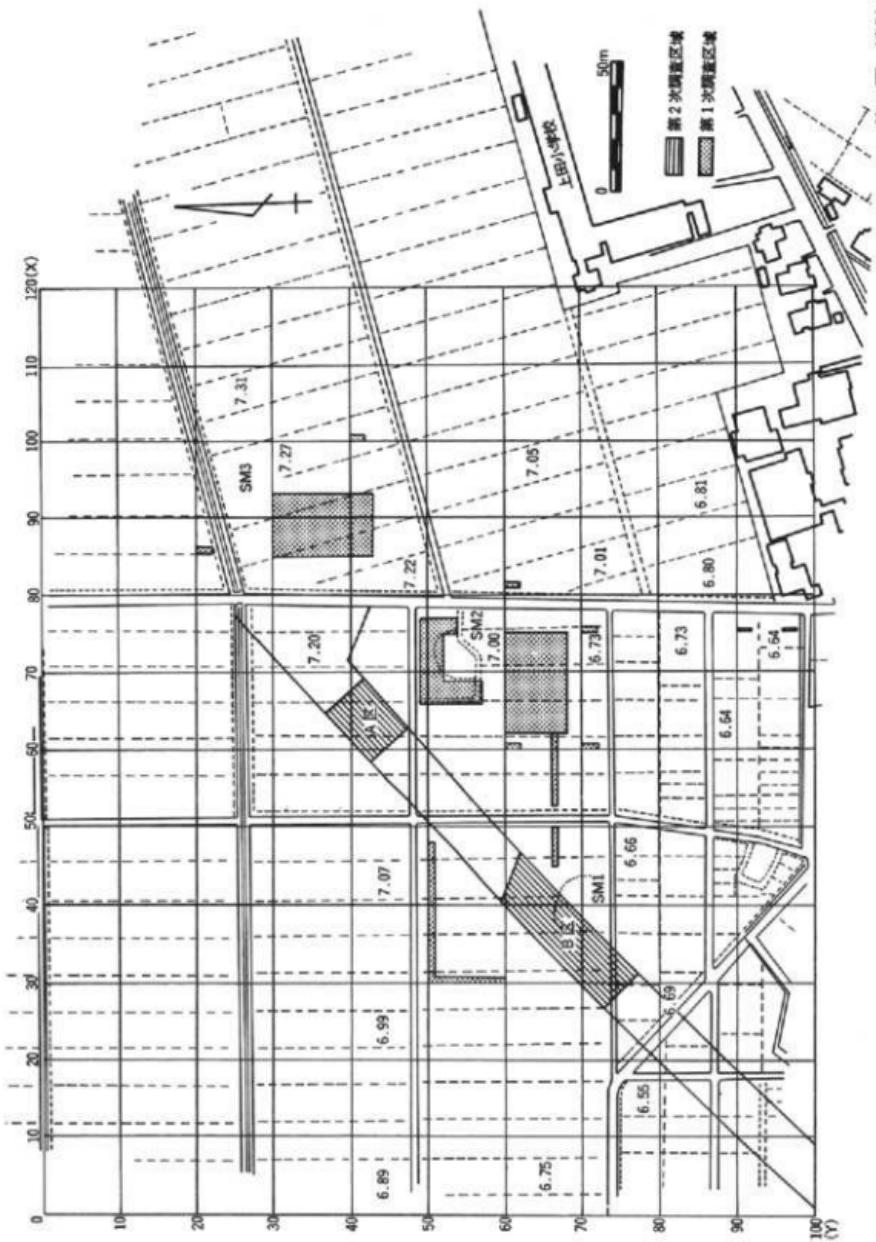
上曾根遺跡は、酒田市街東部約5kmに位置し、酒田市大字上野曾根字上中割に所在する。標高は7.5mを測り、河間低地を南北方向にのびる自然堤防の北側縁付近に立地する。自然堤防は日向川・荒瀬川沿いにみられるほか、安田・漆曾根・布目などにあり、観音寺から南西に放射状に分布する。しかし、これらの自然堤防は高度が低く、不明瞭なものが多い。これまで調査を行った遺跡の大半は狭義の河間低地上に立地し、自然堤防上にある遺跡は城輪柵跡・大槻新田遺跡・上曾根遺跡等である。酒田市北部三角洲や後背湿地に平安時代の遺跡がほとんどみられないことは、当時も湿地等で遺跡の立地に不適であったことを示すものと思われる。

### 2 歴史的環境

上曾根遺跡の北東約2.5kmに、平安時代の出羽国府跡と考えられている国指定史跡「城輪柵跡」がある。城輪柵跡は昭和6年に発見され、それ以後継続的に続けられた調査によりその実態が明らかになってきている。一辺が約720m方形の築地で囲まれた外郭部と、中心に一辺約120m方形の内郭部が確認され、遺構の重複関係、出土遺物の検討から3時期(9世紀前半~11世紀)にわたる変遷がとらえられている。この城輪柵跡を中心として多数の遺跡が確認されている。東側の一条から生石・山楯の山麓側を南北に連なる遺跡列と、大島田・前川・関・横代に連なる遺跡列、さらに本楯・庭田・漆曾根・南興野・熊野田に連なる遺跡列、そして城輪柵跡の東西中軸線と平行となる手藏田地区周辺の東西遺跡列等をあげることができる。この遺跡分布状態から109mを1町単位とし、東西36町、南北46町におよぶ方格地割を想定できるとする考え方もある。

城輪柵跡の南側には、旧建築部材が埋設した筏地業いかだぢぎょう(重層塔の建物基壇)を検出した堂の前遺跡、更に南方に立地する八森遺跡では一辺90m方形の囲み施設の中に礎石建物跡や堀立柱建物跡、八脚門を確認している。また、城輪柵跡外郭線東南付近には猿投窓産綠釉陶器や灰釉陶器を出土した沼田遺跡、人面墨描土器甕内に斎串を入れ、祓之の場が復元された倭田遺跡等がある。

第2図 遺跡全体図



### III 遺跡の概観

#### 1 層序の概要

本遺跡は、庄内北部河間低地を南西方向にのびる自然堤防の北側縁付近に立地する。遺跡の北方約4kmを日向川、南方約2.5kmを新井田川がそれぞれ東から西へ流れている。遺跡周辺には用排水路等を除いて小さな河川は現在認められない。遺跡付近の地形は、北東から南西にかけて極めて緩やかな傾斜を示すが、ほぼ平坦な土地である。

本遺跡の基本的な層序は、精査B区の北西面を除いた壁面によって観察を行った。第4図はその観察の結果を図示したものである。精査A区もほぼ同様な層序を示している。

第I層	畦畔	水田の畦畔である。
第II層	耕作土	水田の耕作面である。
第III層	黒青色シルト	木炭粒や青灰色シルトを含む遺物包含層で、一部暗灰色を呈する部分もある。
第IV層	青灰色シルト	黒色シルトを少量含む。グライ化して黄緑色を呈する部分もある。III層下面又は、本層上面が遺構検出面である。

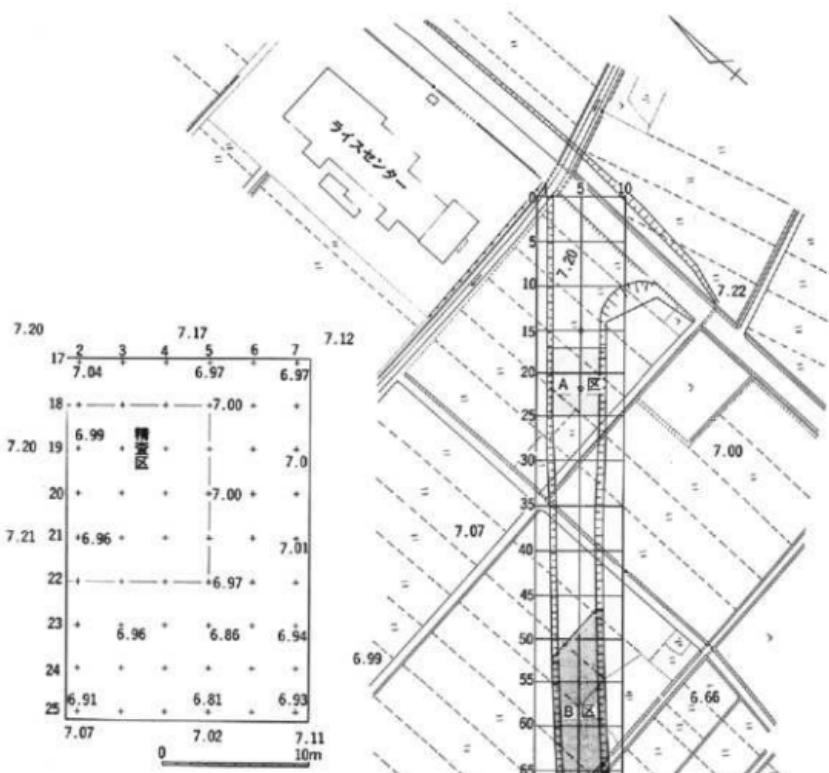
#### 2 遺構の分布

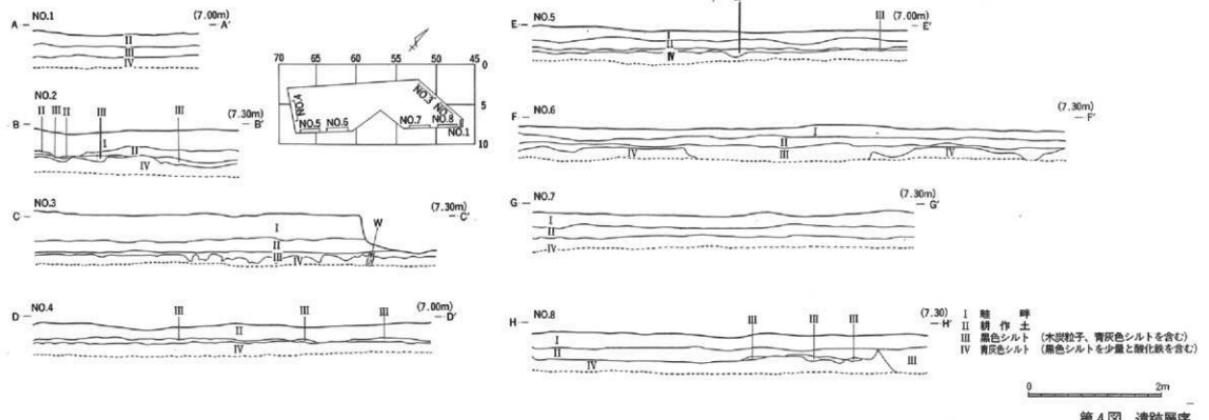
上曾根遺跡の遺構・遺物が分布する範囲は分布調査等より、東西280m・南北160mの約35,000m<sup>2</sup>以上と考えられており、そのなかの東部では昭和61年度に第1次調査が実施され、平安時代・中世・近世以降の時期の遺構・遺物を検出している。

今次調査は第1次調査の成果を踏まえ、遺跡西部の道路改良事業区内を対象として調査を実施した。精査区はトレーナーを入れて試掘した結果より前述のようにA区、B区と呼称し精査を開始した。

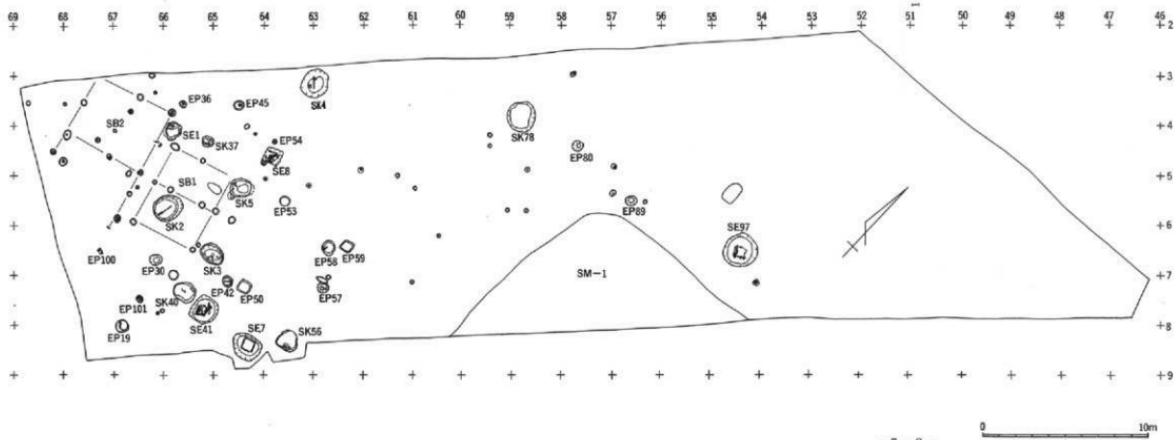
B区で検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟・井戸跡5基・土壙8基・塚1基・溝跡2条、この他建物として構成されない柱穴が多数検出された。特に中央部より南西側に遺構が集中している。建物跡は、2間×2間のものと2間×4間の柱配置をもつ建物跡である。柱穴は、柱根が残存しているもの、あるいは縦板が残存しているものなども含め多数検出されたが、建物跡として確認されたものは上記の2棟だけであった。井戸跡では縦板・横板が良好な形で遺存しているもの、漆器・曲物が出土しているものなどがある。土壙は8基程確認されており、出土遺物として曲物・漆器等の木製品・土器、人面が2ヶ所に線刻された砥石が検出されている。

A区では東側に土器片がわずかに検出された他は、遺構は確認出来なかった。





第4図 遺跡層序



## IV 遺構と遺物

### 1 挖立柱建物跡

#### 1) S B 1 建物跡

B区南西側に位置する。梁行2間、桁行2間の南北棟の建物跡である。主軸方向は磁北からN-2.5°-Wを測り、梁行長4m、桁行長5.2mを測る。北面梁行では、E B34・38柱穴のみが検出され、柱間距離は1.9mを測る。南面梁行ではE B20・110柱穴が検出され、この中間には柱穴は検出されていないが、北面梁行と同様の柱間距離であったと推測される。桁行での柱間距離は、西面桁行E B34・29・20柱穴で北から2.5mを測る。東面桁行ではE B43・110柱穴で2.7mを測る。またE B29～E B43柱穴を結ぶ線上にはE B33・39柱穴がある。

柱穴掘り方は直径30～40cm、確認面からの深さ10cm～30cmの円形ないし橢円形を呈する。E B33・43柱穴では礎板が検出されている他は柱根等の遺存はないが、柱痕跡よりE B33・39柱穴では約20cm程の角柱、E B29・43柱穴では直径20cmの円柱、E B34・110柱穴では直径約15cmの円柱を使用していたと考えられる。

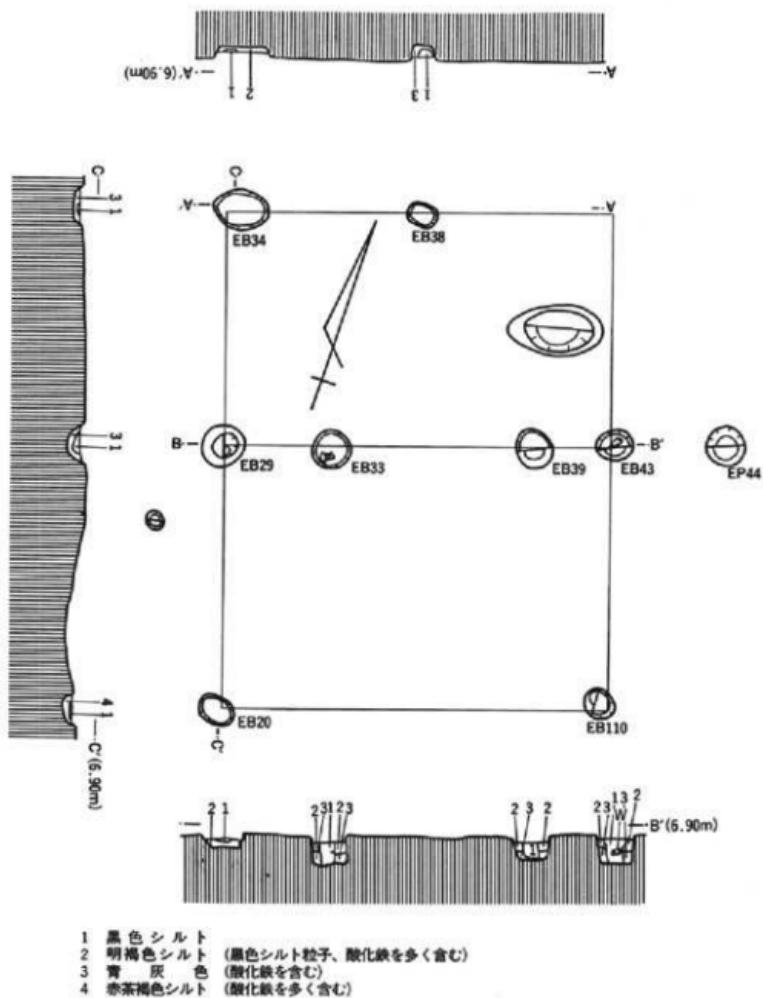
柱穴掘り方の埋土はほぼ3層に分けられ、明褐色シルト・青灰色シルトを基調としており、柱痕跡は木炭粒子を含む黒色シルトである。出土遺物は検出されていない。

#### 2) S B 2 建物跡

B区南西端、S B 1 建物跡の西に隣接する。一部検出されていない柱穴もあるが、梁行2間、桁行4間の南北棟の建物跡である。主軸方向は磁北からN-12°-Wを測り梁行5m、桁行7.2mを測る。北面梁行ではE B35・24柱穴が検出され、柱間距離は2.2mである。これより西側では柱穴が検出されず、調査区外に存在する可能性もあるが、E B24より約2.8m西に位置していたものと考える。南面梁行ではE B18柱穴のみが検出され、この西側で柱穴は検出されていないが、北面梁行と同様の柱間距離であったと推測する。桁行での柱間距離は、東面桁行E B35・103・25・112・18柱穴で北から2.1m・2.0m・1.5m・1.6mを測る。西面桁行ではE B13・11・9柱穴で2.1m・1.3mを測る。E B 9の南側では他に柱穴は検出されていない。

建物跡の内側にはE P10・14・15・16・17・21・22の柱穴がある。特にE B11とE B25を結ぶ線上にはE B16があり、北面桁行と同様の柱間距離を測る。この他は不規則に位置し本建物跡に伴う柱穴であるか不明であるが、E B14では一辺13cmの三角柱根が遺存している。

柱穴掘り方は直径30～50cmで、確認面からの深さ12～38cmの円形を呈する。E B 9・16・



0 2m

18・25柱穴内では礎板が良好な状態で検出され、EB103は掘り方は削平されて礎板のみが検出された。また柱痕等よりEB15・16・35柱穴では直径12~28cm、EB9・11・13・18・25柱穴では10~20cmの角柱を使用していた可能性がある。

柱穴掘り方の埋土はほぼ2層に分けられ、青灰色シルトを基調としており、柱痕跡は木炭粒子を含む黒色シルトである。

本建物跡は、東面平行ではEB18柱穴の南側にEB108・100等の礎板だけ残存している柱穴跡があり、さらに南へ延びる可能性もある。

出土遺物は、EB35柱穴内より赤焼土器の壺・甕の破片が1点づつ、EB11柱穴内より、赤焼土器壺の破片3片、EB10柱穴内より須恵器甕の破片1片が出土している。

## 2 井戸跡

### 1) SE1井戸跡

B区南西側、SB1とSB2の間に位置する。掘り方は南北1.15m、東西0.9mの不整の橢円形を呈する。確認面からの掘り込みは、最深部で1.0mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はオーバーハング気味に立ち上がる。内部からは、角材や板材等の木材が検出されており、これらは、厚く、大きなものが多い。井戸枠組みであろうか。検出状態は、横に積み重ねられたような状態で検出され、一度抜き取られた後廃棄されたものと推測される。覆土は、9層に別れるが、黒色シルトを基調とし、底面付近では青灰色シルトをブロック状に混入する黒褐色粘質土である。

出土遺物は、曲物底板・箸等の木製品の他、赤焼土器・須恵器が細破片で数点出土している。曲物底板は底面付近から検出されている。

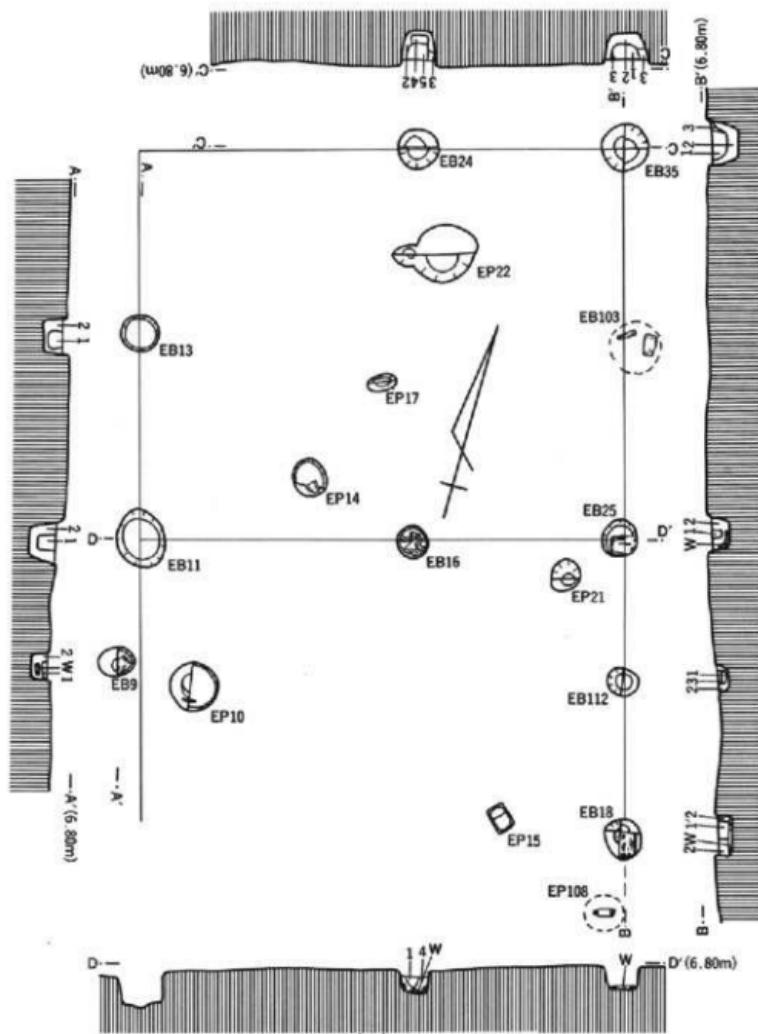
### 2) SE7井戸跡

B区南東端、SE41井戸跡東、SK56土壙の南西に位置する。今回の調査で最も良好な状態で検出された井戸跡である。掘り方は東西1.8m、南北1.45mの橢円形を呈する。確認面からの掘り込みは110~125cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。掘り方の埋土は6層に分かれ粘性のある青灰色シルトを基調としている。

掘り方の中心には方形の井戸枠組みが良好な遺存状態で検出されている。井戸枠は四隅に幅4~8cm、長さ104~110cmの隅柱を打ち込み、これに確認面から5~8cmの地点と、一71cmの地点の、上下二段に横棧を組み、外側に幅10~15cm、長さ65~122cm、厚さ1cm程の板材を縦位に巡らす構造である。規模は75cm方形である。

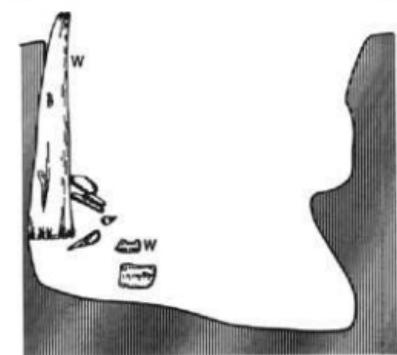
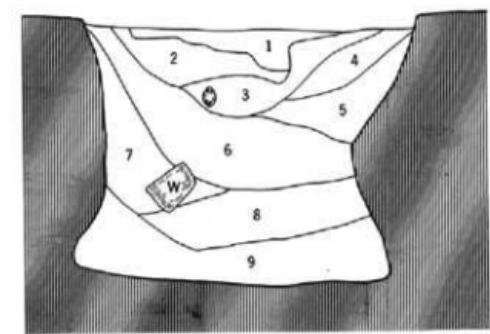
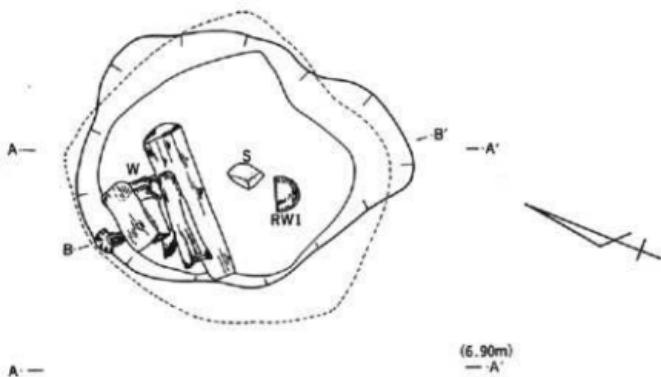
井戸枠内の土層堆積状態は6層に分かれ、青灰色シルトを含む黒色シルトを基調としている。特に最下層からは根糸、植物繊維が多量に検出されている。

出土遺物には箸の他、土師器・赤焼土器・須恵器・近世陶器が数点細破片で出土している。



- 1 黒色シルト (木炭粒、酸化鉄を含む)
- 1' 黒色シルト (明褐色シルト、酸化鉄を多量に含む)
- 2 青灰色シルト (黒色シルトを少量含み、酸化鉄を含む)
- 3 雰囲灰色シルト (木炭粒、酸化鉄を多量に含む)
- 4 明褐色シルト (木炭粒、酸化鉄を多量に含む)
- 5 黒色シルト (1' とほぼ同様だが、青灰色シルトを多く含む)
- 6 黒色シルト (5 とほぼ同様だが黒色シルト、酸化鉄が少ない)

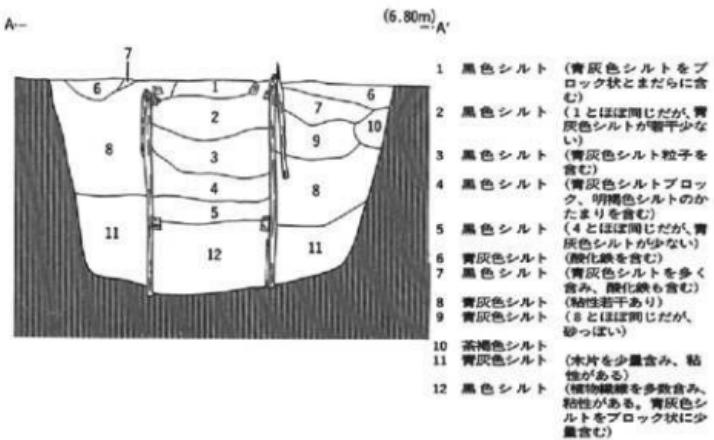
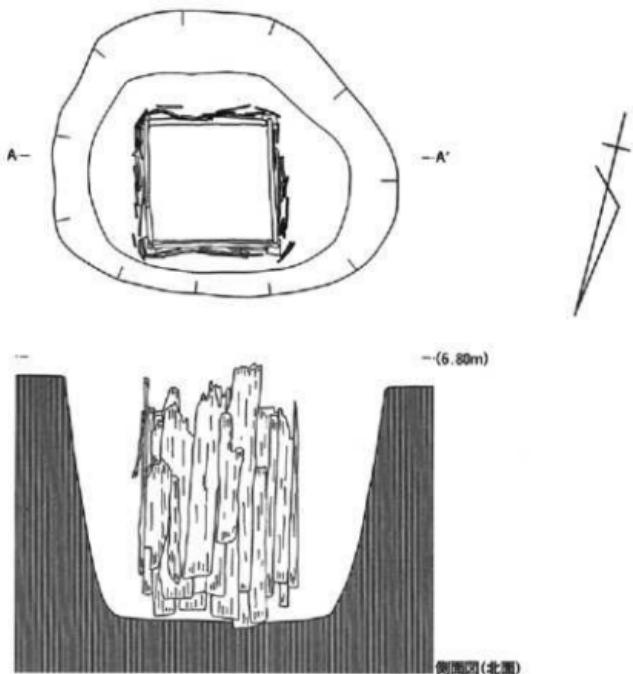
第7図 SB 2 建物跡



- 1 墨青灰色粘質土 (酸化鉄、青灰色粘土を含む)
- 2 黒色シルト (植物纖維を多量に含む。酸化鉄を少量含む)
- 3 黒色シルト (2とほぼ同じだが、2より植物纖維を多く含む)
- 4 黒色シルト (2とほぼ同じだが、酸化鉄が少ない)
- 5 黒色シルト (4とほぼ同じだが、植物纖維の色が黒褐色である)
- 6 黒色シルト (2とほぼ同じだが、植物纖維の色が黒褐色である)
- 7 黒色シルト (植物纖維を多く含む)
- 8 黒褐色粘質土 (青灰色シルトをブロック状に含む。粘性あり)
- 9 黑褐色粘質土 (3よりも大きいブロック状に、青灰色シルトを含む。粘性あり)

0 1 m

第8図 S E 1 井戸跡



第9図 SE7井戸跡

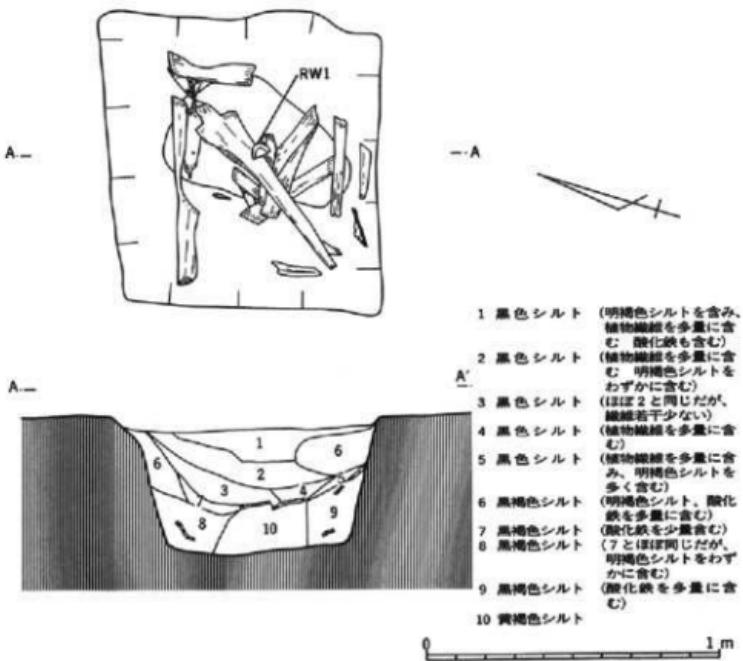
### 3) S E 8 井戸跡

B区南側、S B 1 建物跡、S K 5 土壌の北に位置する。掘り方は1辺90~100cmの正方形を量し、掘り込みは最深部で48cmを測る。底面は平坦な部分は狭く、壁はほぼ垂直に掘り込まれるが、西壁では底面より緩やかに立ち上がり、壁中位からは急激に立ち上がる。

内部からは底面より3~22cm程浮いた状態で幅5~8cm、長さ15~72cm、厚さ1cm程の板材が、多数検出された。これら板材は井戸枠組みの縦板に使用されていたと推測され、その検出状態より廃棄されたものと考えられる。この井戸跡は、S E 7と同様の横桟に縦板を巡らすという形態の井戸跡であったと推測される。

埋土は10層に分かれ、植物纖維を多量に含む黒色シルトが上層に、下層は同様の黒褐色シルトを基調としている。また本井戸跡の南北に礎板を有するE P 48・54柱穴が検出されている。これが本井戸跡に伴うものであるか、他の建物の一部であるかは不明。

出土遺物は漆器が1点出土しており、この他には赤焼土器・須恵器が細破片で数点出土しただけである。



第10図 S E 8 井戸跡

#### 4) S E 41井戸跡

B区南東側、S E 7井戸跡の西に位置する。掘り方は、東西1.5m・南北1.6mの隅丸方形を呈し、確認面からの掘り込みは95cmを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

内部からは井戸枠組みに使用された板材が検出されている。板材は井形に組むために、両端を加工しており、この形態より横桟の部分と考えられる。この板材は完全な状態で遺存しているものでは長さ68.3cm・幅6.3cm・厚さ3cmを測り、6本分の板材が出土した。他に幅広の板材片、細長い板材等が検出されている。このようなことより、本井戸跡は本来、四隅に隅柱を打ち込み、これに横桟を上下二段に組み込み、縦板を巡らした井戸跡であったと推定される。また、横桟の検出状態を観察すると、一部井形に組まれた状態を示しており、このような検出状態は本来の井戸枠組みから隅柱と縦板を抜き取った状態を表わしていると推測できる。

埋土は確認面から約35cmまでの上部では青灰色シルトを含む黒色シルトを基調としており、その下部では粘性のある青灰色シルトのほぼ單一層に近い。

出土遺物は、底面より柄杓・曲物底板が出土しており、また上面近くからは赤焼土器・須恵器が小破片で少量出土している。

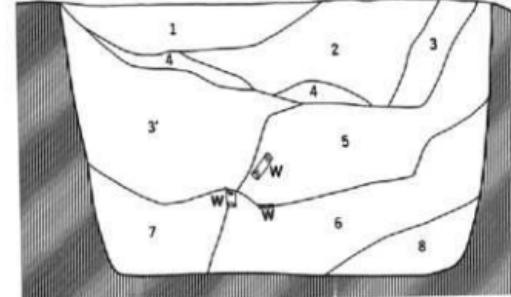
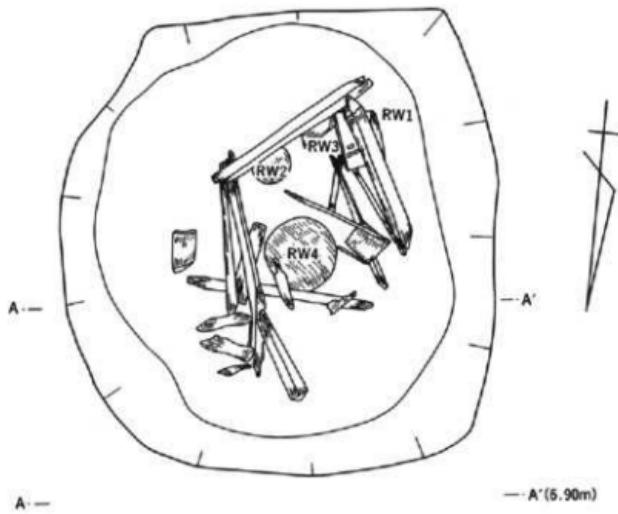
#### 5) S E 97井戸跡

B区北東、SM 1の東に位置する。本井戸跡は、上面付近より、石・赤焼土器等が検出され、当初土壤跡として検出、掘り下げを行った。その結果、確認面より25cm程掘り下げた地点より井戸枠組みの板材が検出され井戸跡と判明した。

掘り方は確認面にて検出された時点では、東西1.5m・南北1.68mの稍円形で確認されたが最終的に、径2mの円形と確認された。堀り込みは、確認面より115cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれるが、北側では若干、斜めに掘り込まれる。掘り方の埋土は青灰色シルト～黒灰色シルトを基調とし、井戸枠内の埋土は、木炭を含む黒色シルトを基調としている。

掘り方の中心には方形の井戸枠組が検出されている。井戸枠組は四隅に隅柱を打ち込み横桟を確認面から-45cmの地点と-95cmの地点の二段に組み、これに縦板を巡らす構造のものである。しかし、横桟は上段では南面、下段では西面のそれぞれ1カ所づつに残存するのみである。また、縦板も北面ではあまり残存しておらず、土圧により全体的に内側に垂んだ状態で検出された。

出土遺物は、図示(第1図13~16)したものの他にも、土師器・赤焼土器・土師器等が小破片にて多数出土している。これらがかなり上面から、石などと一緒に出土している状態より、井戸が廃棄された後に投げ捨てられたものと推測される。



- 1 黒色シルト (青灰色シルトをブロック状に多く含む 酸化鉄を多く含む)
- 2 黒色シルト (1よりも多量に青灰色シルトを含む 酸化鉄も含む)
- 3 青灰色シルト (黒色シルトを少量含む)
- 3' 青灰色シルト (3よりも粘性がある)
- 4 青灰色シルト (3とは同じだが、黒色シルトが非常に少ない)
- 5 青灰色シルト (黒色シルトを比較的多く含む 粘性あり)
- 6 青灰色シルト (5とは同じだが、若干5よりも黒色シルトが少ない 粘性あり)
- 7 青灰色シルト (6とは同じだが、粘性が4よりある)
- 8 青灰色シルト (6よりも若干黒色シルトが少ない 粘性あり)

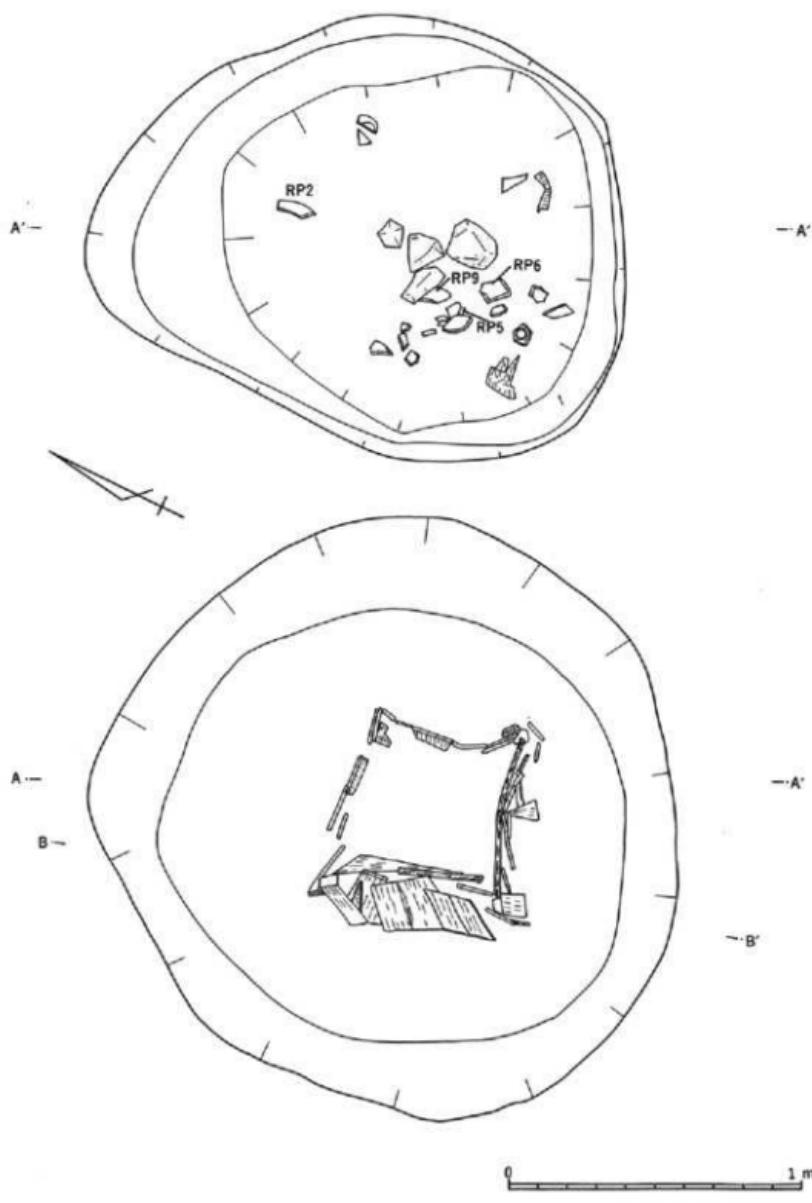
0 50cm

第11図 S E 41井戸跡

### 3 井戸跡出土遺物 (第14・15図)

#### S E 1 井戸跡

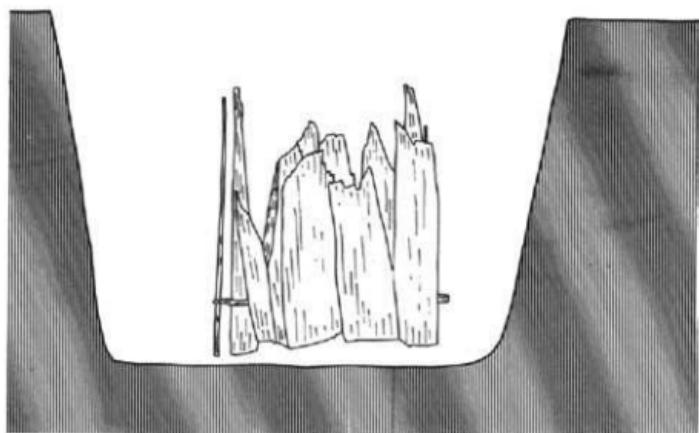
遺物は木製品及び土器片が出土している。内訳は第14図1の曲物底板、2~7の箸で、



第12図 SE97井戸跡

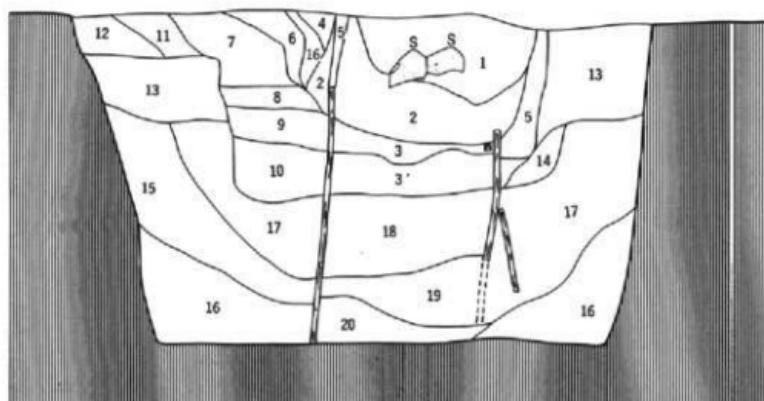
B-

(7.00m) B'



A-

(7.00m) A'



- 1 黒褐色シルト (酸化鉄を多量に含み、木炭を含む)  
2 黒褐色シルト (酸化鉄を多量に含み、木炭も多量に含む)  
3 黒色シルト (酸化鉄を多量に含み、小石砂粒を含む)  
3' 黒色シルト (3よりも酸化鉄少ない)  
4 黒色シルト (3よりも酸化鉄少ない)  
5 黒色シルト (2とはほぼ同じだが、しまりが非常に多い)  
6 噴灰褐色シルト (酸化鉄、木炭を多く含み、明褐色シルトを比較的多く含む)  
7 噴灰褐色シルト (6とはほぼ同じであるが、木炭、明褐色シルトが少ない)  
8 噴灰褐色シルト (明褐色シルト、酸化鉄を多量に含み、木炭を少量化する)  
9 青灰色シルト (酸化鉄を多く含む)  
10 青灰色シルト (4よりも酸化鉄が少ない)  
11 噴灰褐色シルト (3とほぼ同じだが、8よりも明褐色シルトを多量に含む)  
12 噴灰褐色シルト (明褐色シルト、酸化鉄を多量に含む)  
13 噴灰褐色シルト (7よりも明褐色シルト、酸化鉄を多量に含む)  
14 青灰色シルト (11よりも酸化鉄が少ない)  
15 青灰色砂質シルト (5よりも酸化鉄を多く含み、酸化鉄をわずかに含む)  
16 黒褐色シルト (木炭、灰を多く含む)  
17 黒褐色シルト (青灰色シルトを含む)  
18 黒色シルト (青灰色シルトを含む)  
19 黒色シルト (植物繊維、木片等含む)  
20 黒色シルト (青灰色シルトを多く含む)

0 1 m

第13図 S E 97井戸跡

この他に箸は9点出土している。土器は細片で赤焼土器坏4点・甕2点・須恵器1点が出土している。1が底面直上で検出された他は、覆土中で検出されたものである。

1は曲物の底板と考えられる板目の板材である。径13.4cm・厚さ9mmを測る。2~7は木製箸で、長さ20~24cm・太さ0.5~0.7cmを測り、いずれも完形の箸である。

#### S E 7 井戸跡

遺物は箸及び土器片が出土している。箸は4点出土しており、土器は27点出土している。箸は第14図8~11に示したように、完形のものと一部欠損しているものが2点づつ出土している。また土器の内訳は、赤焼土器坏10点・甕11点・須恵器坏2点・甕3点・土師器坏1点、他に近世陶器1点が細破片で出土している。

#### S E 8 井戸跡

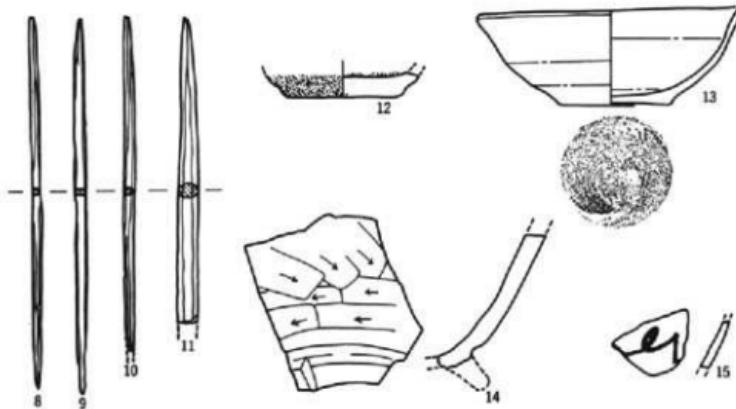
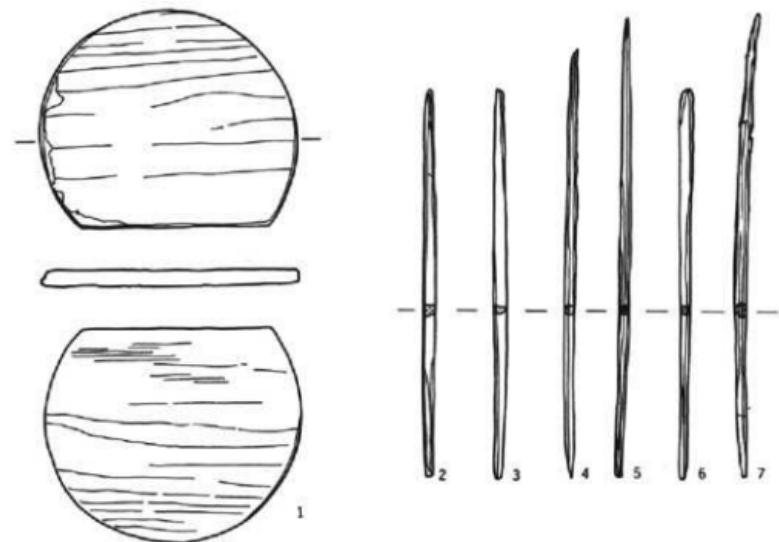
遺物は漆器・土器片が出土している。漆器は第14図12に示したものである。土器は赤焼土器坏2点・須恵器坏1点・甕1点が出土しているが、これらは全て細破片で覆土中より出土しているものである。

#### S E 41 井戸跡

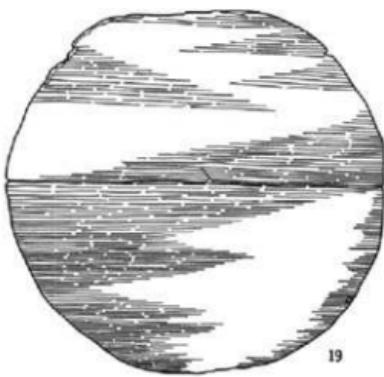
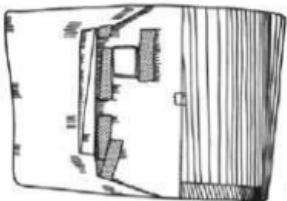
遺物は、木製品・土器片が出土している。木製品には、第15図17の曲物及び18~20の底板3点がある。17は曲物柄杓であり、身のみをとどめる。側板の継合せは2個所、1列内4段縫じと1列内1段縫じであり、内面に縦平行線のケビキを入れる。側板重合せ部分の上寄りに長方形の柄孔をあけ、これと対応する位置にも孔をあける。上寄りの孔が大きく中位の孔は小さい。底板との結合は4個所から木釘を打込んで行う。土圧により歪みが著しく、側板に亀裂が生じている。径16~19.2cm・高さ13.2cmを測る。18・19・20は曲物の底板と考えられ18は径13.4cm・厚さ0.9cm、19は径26cm・厚さ0.6cm、20は径25cm・厚さ1cmを測る。これらの曲物は、井戸跡底面にて検出されている。土器は赤焼土器坏18点・甕6点・須恵器坏4点・甕1点が小破片で比較的上位の覆土内より出土している。

#### S E 97 井戸跡

遺物には土器があり、木製品は出土していない。土器は赤焼土器坏239点・高台付坏1点・甕15点・須恵器坏2点・甕2点・土師器8点が出土しているが、全て細破片である。この他、第14図13~16がある。13は体部~口縁部が約1/2遺存、底部が完存している赤焼土器の坏である。器肉の薄い底部から内骨気味に立ち上がる体部は、口縁部で外反する。底部は回転糸切り無調整、体部はロクロ調整であるが、摩滅が著しい。14は有台の鉢と考えられ、体部下位はロクロ調整後ヘラ削りされる。台部は欠損。15は赤焼土器坏の体部片で墨書が施されるが、篆文は不明。16は、須恵器甕の調部片である。これら出土遺物は、確認面より~10~30cmの覆土中より出土したものがほとんどである。



第14図 井戸跡出土遺物(1)

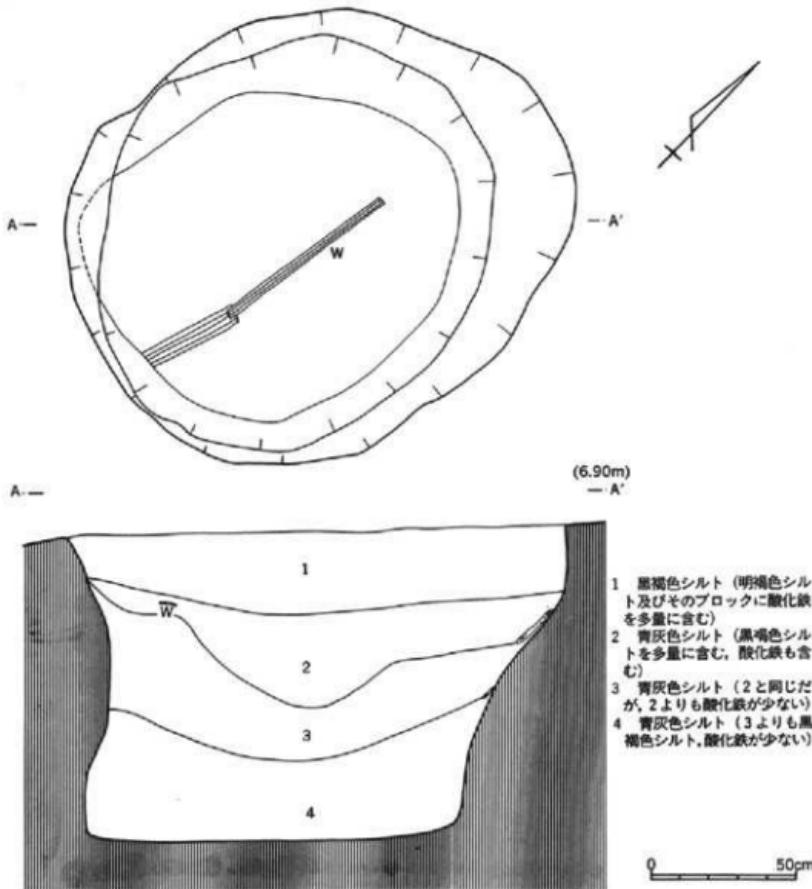


0 10cm

## 4 土 壤

### 1) SK 2 土壤

調査区南西側、SB 1建物跡内に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は南北1.75m東西1.45mを測る。掘り込みは確認面より1.06m掘り込まれる。平坦な底面から北壁は外反して立ち上がり、確認面付近ではほぼ垂直に立ち上がる。南壁は、オーバーハング気味に立ち上がる。覆土は4層に別れ、上面が黒褐色シルトの他は、青灰色シルトを基調としている。また底面からは、加工された板材2点が検出されたが、どのように使用されたかは不明である。出土遺物は土師器・赤焼土器・須恵器が小破片で出土している。

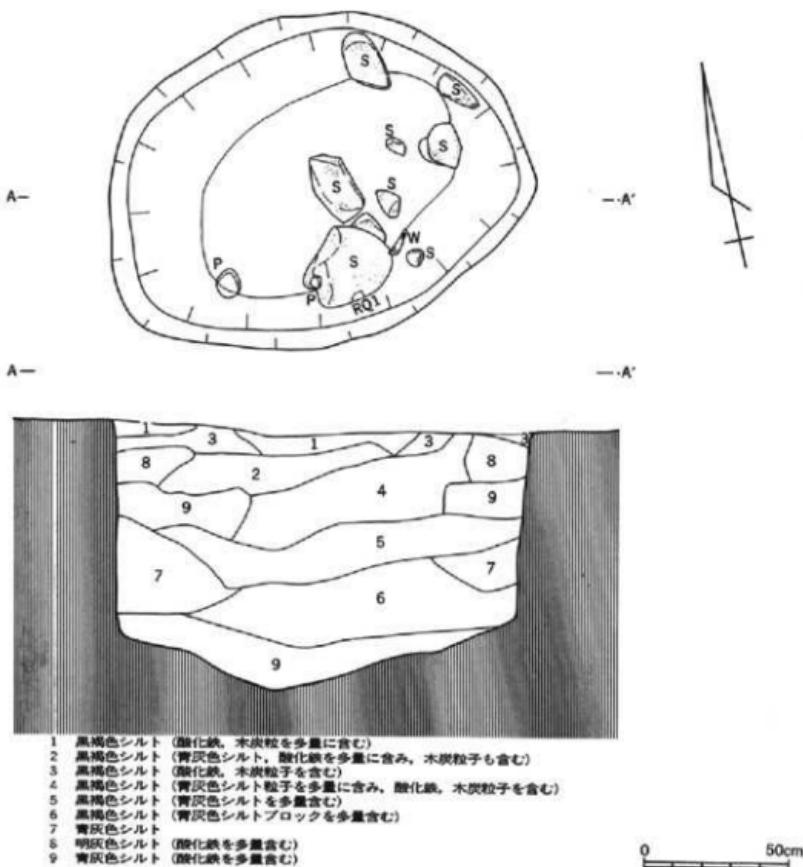


第16図 SK 2 土壌

## 2) SK 3 土壌

調査区南西側、SB 1 建物跡の東に位置する。平面形は梢円形を呈し、規模は東西1.49m南北1.15mを測る。掘り込みは最深部で確認面より92cmを測る。底面は船底形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は9層に分かれ、青灰色シルト混りの黒褐色シルトを基調としている。内部には、底面付近及びこれより10~30cm浮いて、大形の自然石が10個程出土している。

出土遺物は赤焼土器、須恵器が出土しており、これらのはほとんどが小破片である。この他に、石製品も1点出土している。

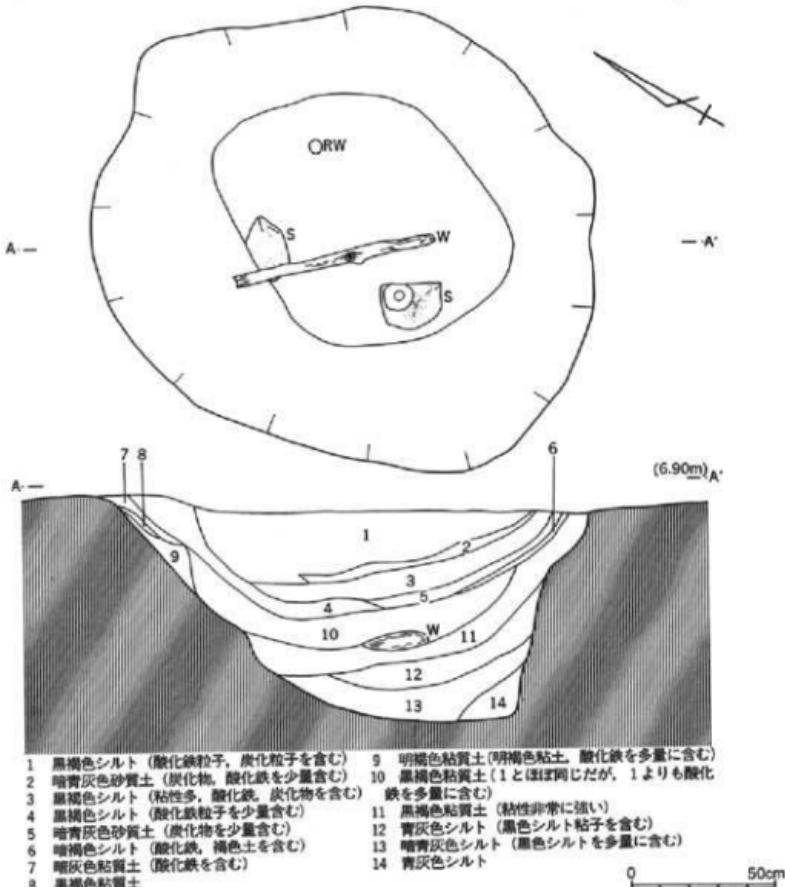


第17図 SK 3 土壌

### 3) SK 4 土壌

調査区西側の北端に位置する。平面径は不整円形を呈し、規模は南北1.85m・東西1.55m、掘り込みは確認面より75cmを図る。底面は凹凸があり北西壁ではやや緩やかに立ち上がり、南西壁ではほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は14層に分かれ、上部は黒褐色シルト、下部は青灰色シルトを基調としている。内部からは自然石・自然木・漆器が検出されている。自然石には、石の上に瓢箪の皮が付着している状態で検出されたものもある。この他、土師器・赤焼土器・須恵器・摺鉢片・かわらけ、等が出土している。これらのほとんどは細破片である。



第18図 SK 4 土壌

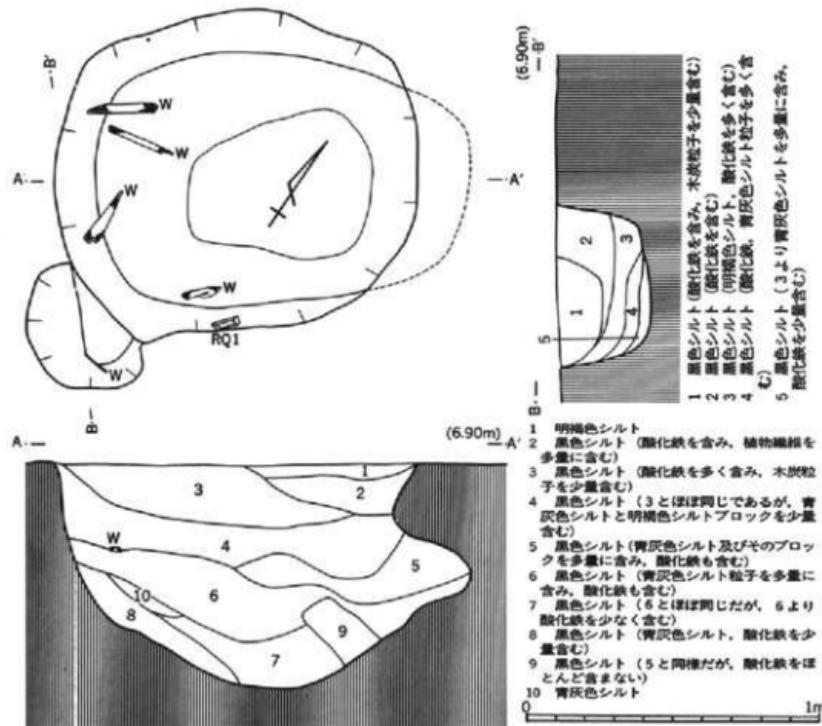
#### 4) SK 5 土壌

調査区南西側、SB 1の東、SE 8の南に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径1.1~1.25mを図り、確認面よりの掘り込みは最深部で76cmである。底面は若干摺鉢状を呈し、壁中位までは緩やかに立ち上がり、その後南西壁ではほぼ垂直に、北東壁ではオーバーハングして立ち上がり確認面に至る。覆土は10層に分かれ黑色シルトを基調とする。

出土遺物は多量の箸及び人面線刻画のある砥石、木材片が出土している。この他土器・赤焼土器・須恵器・かわらけ等が小破片で出土している。砥石は上面付近、確認面から10cmの壁際で出土している。

#### 5) SK 37 土壌

調査区南西側、SK 1の北側に位置する。平面形は円形を呈し、規模は径63~70cm、確認面からの掘り込みは60cmを図る。底面は若干起伏があるがほぼ平坦で、北壁では垂直に、南壁では若干オーバーハング気味に立ち上がる。覆土は5層に分かれ、木炭粒を含む黒色



第19図 SK 5 土壌

シルトを基調としている。内部からは長さ56cm・幅18cm・厚さ1cm前後の板材を最大として、大小の薄い板材が折り重なるような状態で検出されている。

出土遺物は、箸及び赤焼土器・須恵器が細破片で少量出土している。

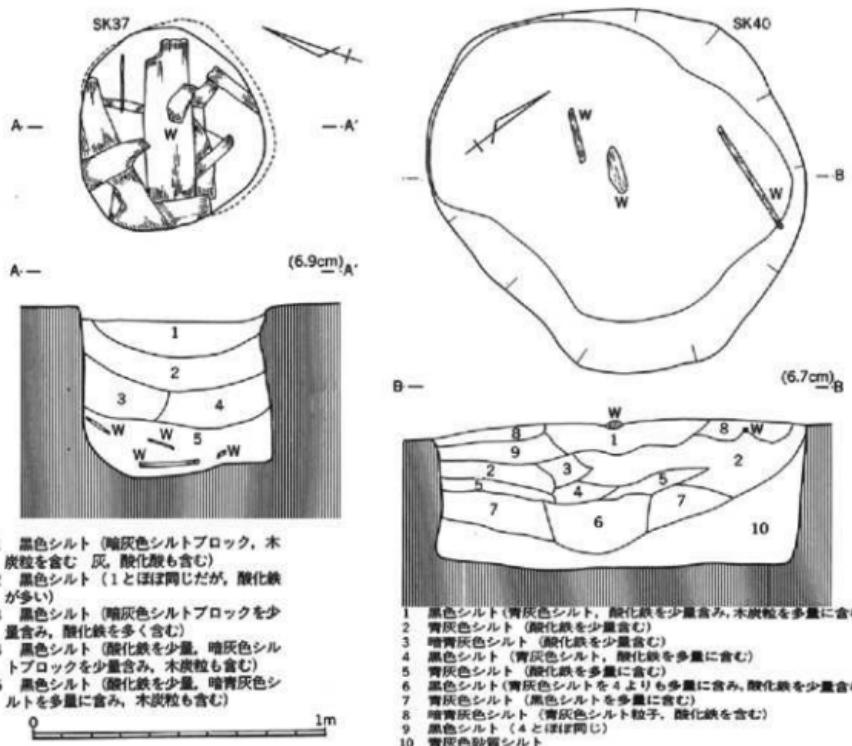
#### 6) SK 40土壤

調査区南西側、SE 41の西に隣接して位置する。平面形は不正円形を呈し、規模は東西1.37m・南北1.16m、掘り込みは確認面から51cmを測る。底面は平坦でほぼ垂直に周壁に立ち上がる。覆土は10層に分かれ、黒色シルトと青灰色シルトが交互に堆積している。

出土遺物は上面付近から棒状の木材と木材片が出土している。この他、赤焼土器・須恵器が細破片で少量出土している。

#### 7) SK 56土壤

調査区南西側、SE 7井戸跡の東に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は東西1.27m南北1.23m、掘り込みは確認面より65cmを測る。底面は凹凸があり、壁は垂直に立ち上がる。覆土は8層に分かれ、植物繊維・木炭粒を含む黒色シルトを基調としているが、上



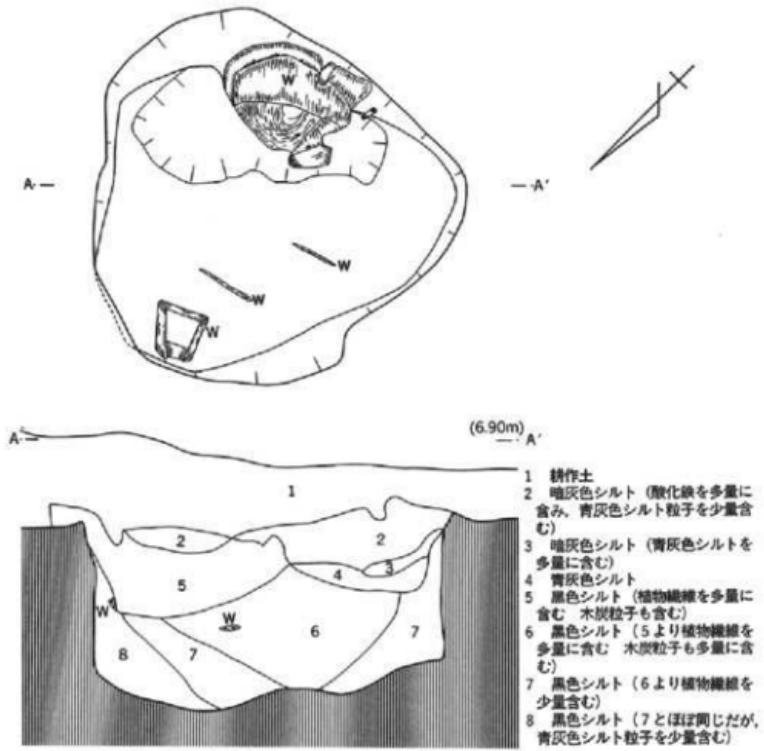
第20図 SK 37・40土壤

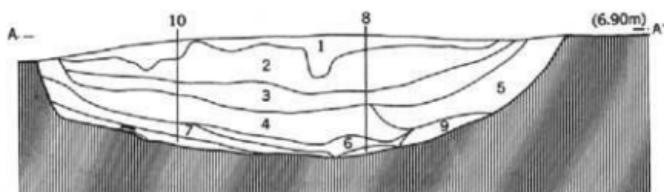
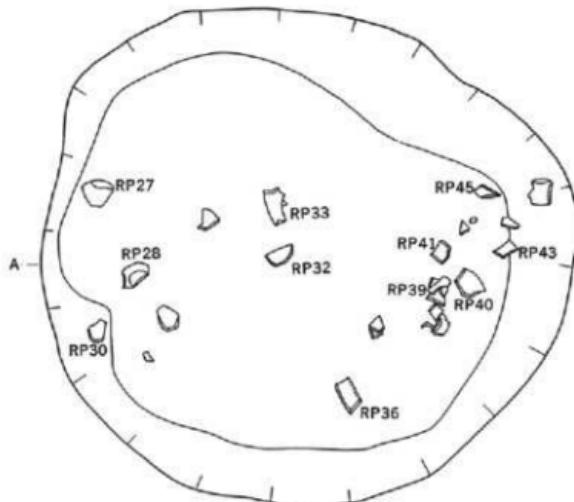
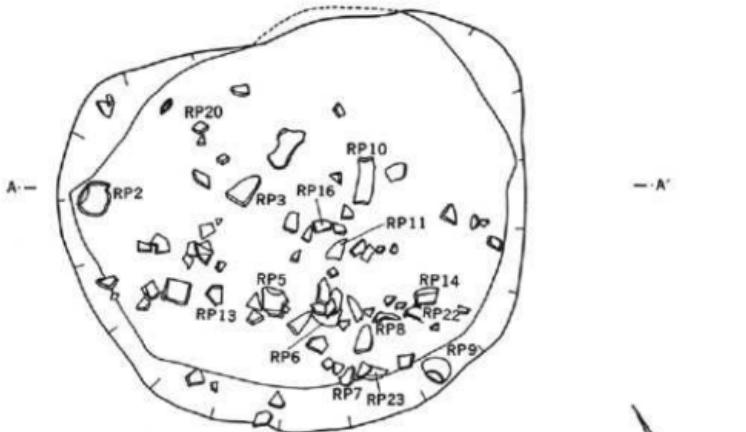
面には暗灰色シルトが若干堆積している。南壁付近からは直径約40cm程の大きな丸木が、一部半截された状態で検出されている。

出土遺物は、箸及び須恵器坏の破片1点が検出され、また北壁付近に、幅10cm・長さ18cm程の板材を方形に置いて、箱形にした状態のものが出土した。底板は検出されていない。

### 8) SK78土壤

調査区中央付近、SM1の北に位置する。平面径は不整円形を呈し、断面形は船底形を呈する。本土壤は遺物の出土状況及び土層の堆積状況より上層と下層の2期があると考えられる。これは、遺構確認の時点では上層のプランが検出され、これを掘り下げた結果、断面図の1～3層まで掘り下げられ、2層3層の黒色シルト内より多量の土器が出土した。これら出土土器を取り上げ、さらに掘り進むと、4・5層の明褐色シルト層の下層にも黒色シルトが堆積しており、土器も検出された。このようなことから、1～3層の上層におけるものと、4～10層の下層のものと2期があると考えた。しかし、出土土器に時期差は認





- 1 黄青灰色シルト〔明褐色シルトブロック、酸化鉄を多量に含む 木炭粒子を含む〕
- 2 黒色シルト〔酸化鉄を含む 木炭粒子を含む〕
- 3 黒色シルト〔2とほぼ同じだが、酸化鉄が少ない 木炭粒子を含む〕
- 4 明褐色シルト〔青灰色シルト、酸化鉄を多量に含む〕
- 5 明褐色シルト〔酸化鉄を多量に含む〕
- 6 哈青灰色シルト〔黑色シルトを含み、酸化鉄を少量含む〕
- 7 黑色シルト〔酸化鉄を多量に含む〕
- 8 黑色シルト〔酸化鉄、青灰色シルトを少量含む〕
- 9 黑色シルト〔7と同様だが、明褐色シルトを多量に含む〕
- 10 青灰色シルト〔酸化鉄を多量に含む〕

0 1 m

第22図 S K 78土壤

められず、近い時期の連続利用と考えられる。つまり、下層の土壤が使用されなくなり4・5層まで自然堆積した後、上層の土壤として再利用されたと考えられる。

規模は、上層の土壤では、東西1.68m・南北1.35mを測り、確認面から3層下面までの深さは27cmである。堆積土は、木炭粒を含む黒色シルトを基調とし、上面に黄青灰シルト層が堆積するものである。下層の土壤では、東西1.72m・南北1.85m、確認面からの掘り込みは43cmを測る。堆積土は、上層とほぼ同様、黒色シルトの上面に明褐色シルトが堆積するというものである。

上層の土壤は、底面は若干凹凸があるもののほぼ平坦で南壁では緩やかに立ち上がるが北壁ではややオーバーハングして立ち上がる。下層の土壤は、ほぼ平坦な底面より北西壁付近ではやや急激に立ち上がるが、他は緩やかに立ち上がる。

出土遺物は下層では赤焼土器が、上層では土師器・赤焼土器・須恵器が出土している。

### 5 土壤出土遺物（第23図～25図）

SK2土壤では第23図21～23が出土している。21は器肉の若干薄い底部から屈曲気味に立ち上がる部は直線的に広がり口縁部に至る。この他に、赤焼土器壺・甕・高台付壺・須恵器壺壺・甕・土師器壺等の細破片が76点出土している。

SK3土壤では第23図24・25が出土している。24は須恵器壺底部、25は確認面より約20cm程掘り下げた地点より出土した石製の装飾品？である。

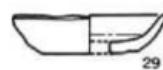
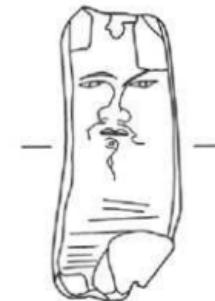
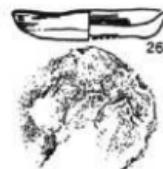
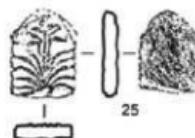
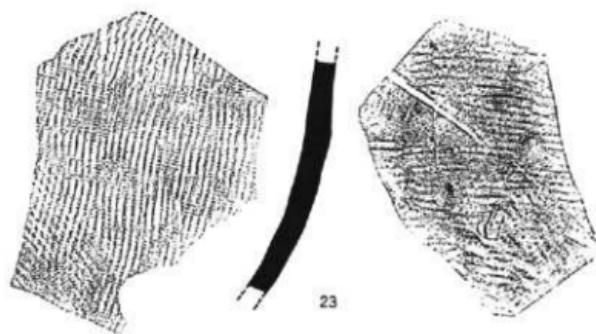
この他に赤焼土器壺・須恵器壺・壺・甕の細破片が30点出土している。

SK4土壤では第23図26～28が出土している。26は手捏ねのかわらけで内外面ナデで、底部外面はほとんどが欠損しているが一部指頭痕がみられる。28は漆器の皿で、平底の底部外面の漆は剥落している。内外面とも黒漆である。27は擂鉢片である。この他、赤焼土器壺・甕・須恵器壺・甕の細破片が76点出土している。

SK5土壤では第23図29～33が出土している。29はロクロ成形のかわらけで、底部は回転糸切りである。33は2カ所に人面線刻画が描かれる砥石である。1つは非常に写実的に描かれており、口髭・頬髭も観察される。もう1つは小さく簡略化して描かれたものである。これは確認面より、-10cmの地点にて検出されている。30～32は箸で本土壙跡からはこの他に83点の箸出土している。他に赤焼土器壺・甕・須恵器壺・甕・土師器壺が41点、細破片で出土している。

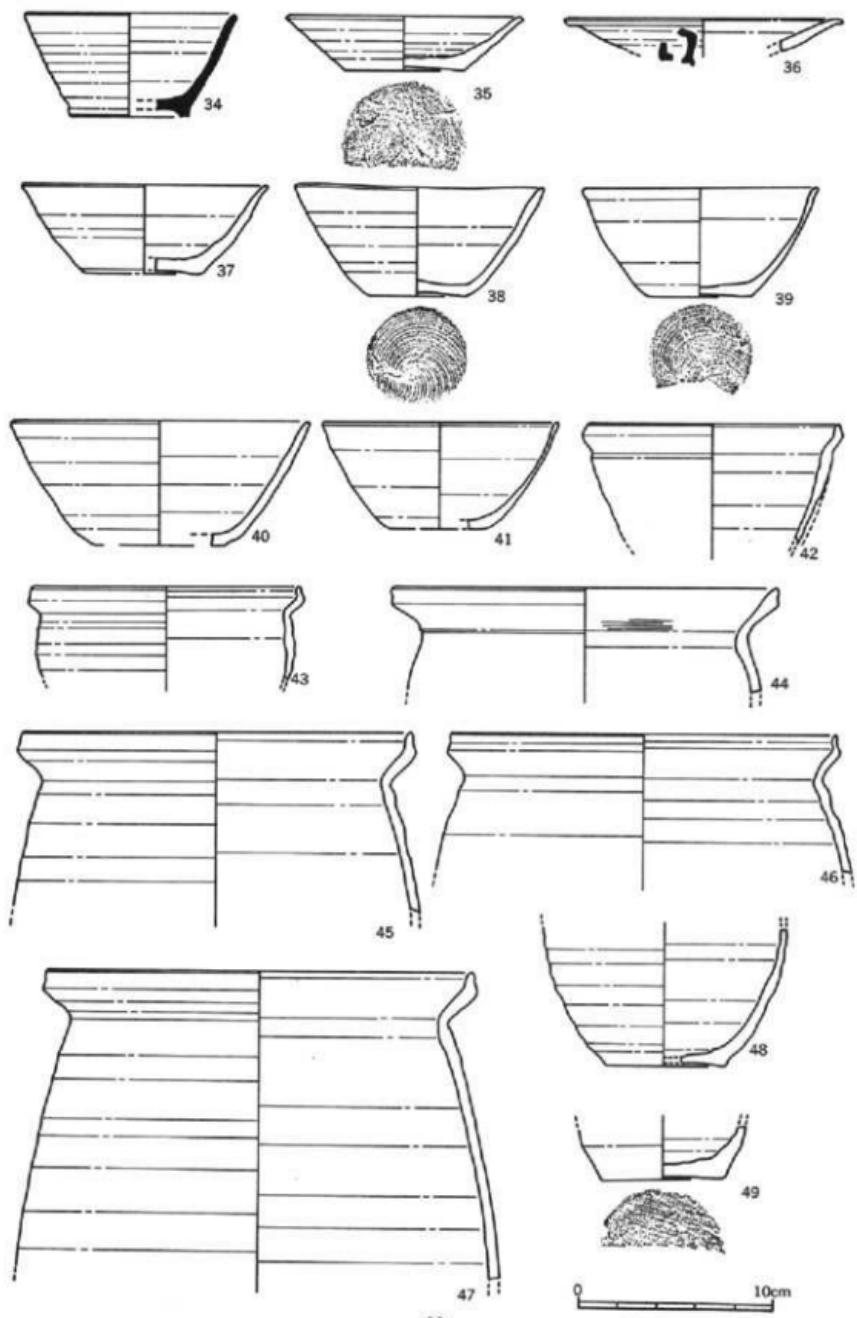
SK37土壤では赤焼土器壺・甕・須恵器壺・甕が12点細破片で出土し、他に箸が1点出土している。

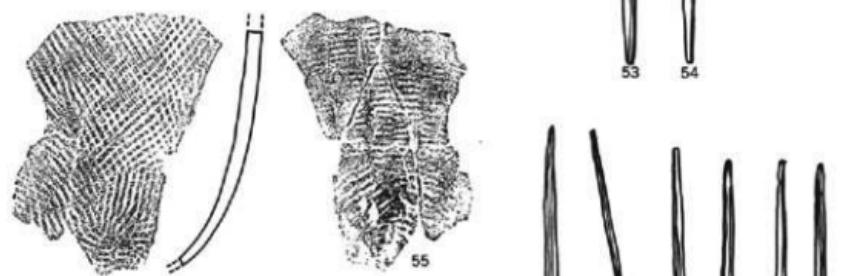
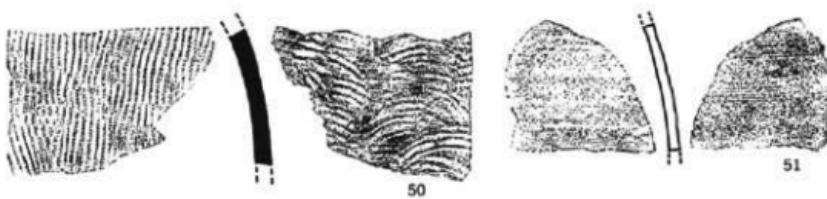
SK40土壤では、第25図53・54の箸2点の他、赤焼土器壺・甕・須恵器壺が細破片で21点出土している。



0 10cm

0 5cm





0 10cm

第25図 土壤出土遺物(3)

S K56土壤では、第25図52～62など9点の箸と須恵器坏が1点出土し、この他に長さ18cm・幅10cmの板材を方形に置いた状態のものが検出されている。底板状のものない。

S K78土壤では、第24図・25図の34～52・55・56の他、赤焼土器坏67点・甕40点・須恵器坏11点・甕1点・土師器坏2点が小破片で出土している。須恵器が非常に少なく、赤焼土器が9割を占める。34は須恵器高台付坏で回転糸切りの底部より屈曲気味に立ち上がる体部は直線的にのび口縁部に至る。35・36は赤焼土器皿で、35は若干器肉の薄い底部より屈曲気味に立ち上がる体部は直線的にのびる。内面に炭化物が多量に付着している。36は墨書きが施され、内面に墨痕を有し、転用窯の可能性もある。口縁部は強く外反し、須恵器とも言える焼成である。37～41は体部が内彎気味に立ち上がり、37・39・41は口縁部で外反する。38～41は底径に比べて口径が大きく、器高も高い坏である。44～47は赤焼土器甕である。43～47は頸部から屈曲気味に立ち上がる口縁部で外面に直立する面をもつ。胴部は緩やかに内彎する。42は鉢形を呈するもので、外面の大部分が剥落する。48・49は甕胴下半部である。50・52・55・56は甕拓影図である。50は須恵器、他は赤焼土器である。52は、胴上半部でロクロ痕の下端に叩き目を残す。おそらく下半部は全て叩き成形であろう。55は胴下半～底部付近で外面は格子目風叩き、内面は平行アテが施される。

## 6 柱穴

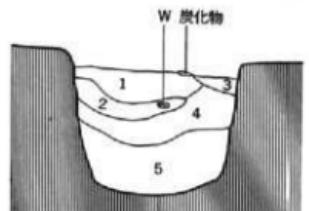
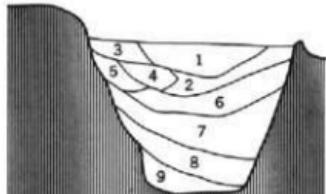
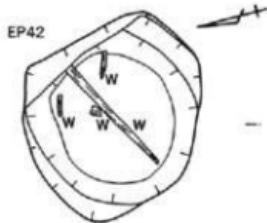
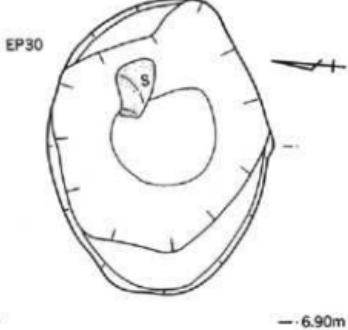
E P30・32・47・57は、土壤とも考えられるが、明確ではない。またE P10・14・45・46・48・54・55・104は、礎板・柱根・柱痕を遺存する明確な柱穴であるが建物跡を構成するものは確認できなかった。この他、総数41基が検出されている。

E P30は平面形は梢円形を呈し、東西1m・南北75cm・深さ55～65cmを測る。覆土は木炭粒を含む黒色シルトを基調としている。上面より自然石が出土しており、出土遺物は赤焼土器片・須恵器片が少量出土している。

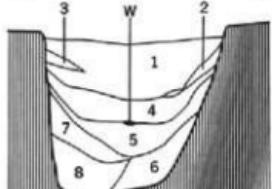
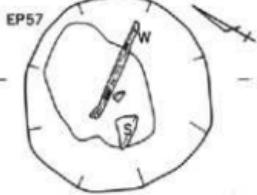
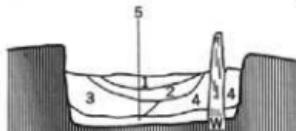
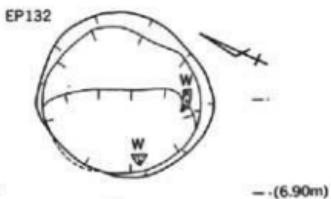
E P32は円形を呈し、東西56cm・南北61cm・深さ27cmを測る。平坦な底面から、壁はほぼ垂直に立ち上がる。南壁付近に、長さ30cm・幅約10cmの板材が立つ。出土遺物は、赤焼土器片がわずかに検出された。また、西壁付近でも一辺5cm程の三角形の木材を検出した。

E P42はほぼ円形を呈し、径60cm・深さ50cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや凹凸があるがほぼ平坦である。覆土は黒色シルトを基調とする。内部からは底面より30cm程浮いて、長さ45cm・幅4cmの板材が検出されている。他に坏・甕の赤焼土器片が少量出土している。

E P57はほぼ円形を呈し、直径約65cm・深さ55～60cmを測る。北壁はほぼ垂直に掘り込まれ、南壁はやや緩やかに立ち上がる。内部からは自然石・自然木が検出され、この他に、赤焼土器片・須恵器片・土師器片が少量出土している。



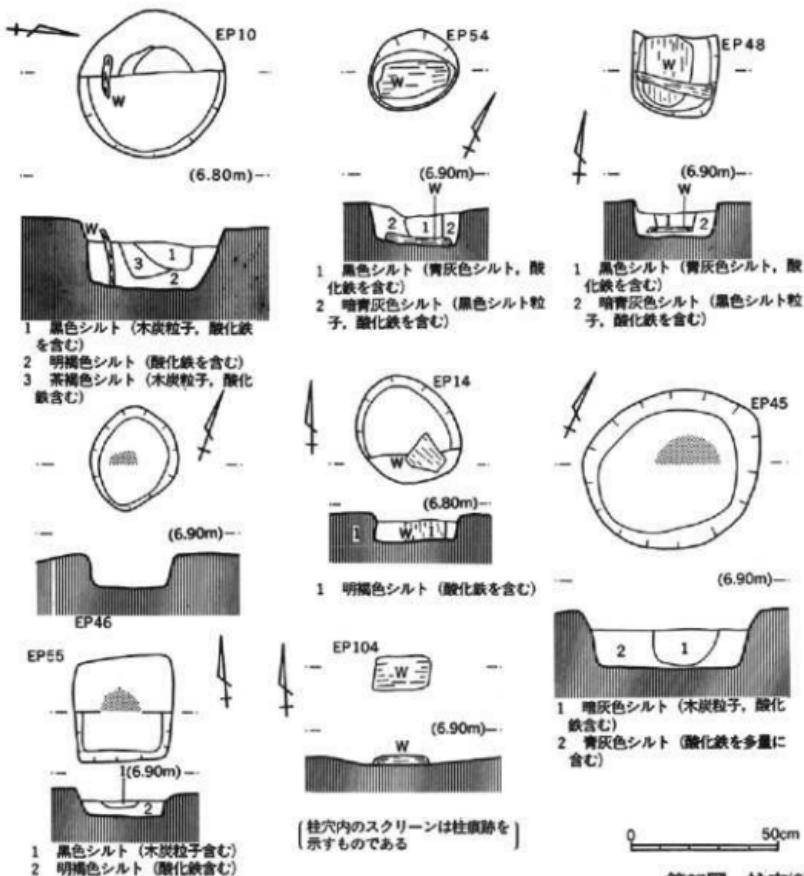
- 1 黒色シルト (灰を多量に含み、明褐色シルトをブロック状)  
2 黒色シルト (明褐色シルトを多量に含み、青灰色シルトブロックを少量含む)  
3 黒色シルト (明褐色シルトを多量に含み、青灰色シルト粒子、木炭粒子を少量含む)  
4 黒色シルト (青灰色シルトを多量に含み、酸化鉄を少量含む)  
5 青灰色シルト (黑色シルトを含む)



- 1 黒色シルト (酸化鉄を少量含み、しまりがない)  
2 黑褐色シルト (黄褐色粒子を少量含む)  
3 黄褐色シルト (黑色シルトを多量に含む)  
4 噴黃褐色シルト (青灰色シルト、黑色シルト、酸化鉄を多量に含む)  
5 噴黃褐色シルト (4よりも酸化鉄を多量に含み、黑色シルトを少量含む)  
6 噴黃褐色シルト (酸化鉄、噴青灰色シルトを多量に含む)  
7 黑褐色シルト (酸化鉄、青灰色シルト粒子を含む)  
8 黑褐色シルト (青灰色シルト粒子を少量含む)

0 50cm

第26図 柱穴(1)



第27図 柱穴(2)

E P 10・14はS B 2建物跡の内部で検出された柱穴である。E P 10は円形を呈し、直径50cm深さ22cmを測る。E P 14は1辺13cmの三角柱が遺存しているもので、掘り方は33~40cmの梢円形を呈し、掘り込みは10cm程である。

E P 48・54はS E 8井戸跡の南北に位置し、礎板を遺存する柱穴である。この井戸跡に伴う柱穴であろうか。E P 104も礎板を遺存する柱穴であるが、掘り方は削平され検出されない。

E P 45・46・55は円形・方形の掘り方で、柱痕を残す柱穴跡である。

## 7 塚

### SM 1

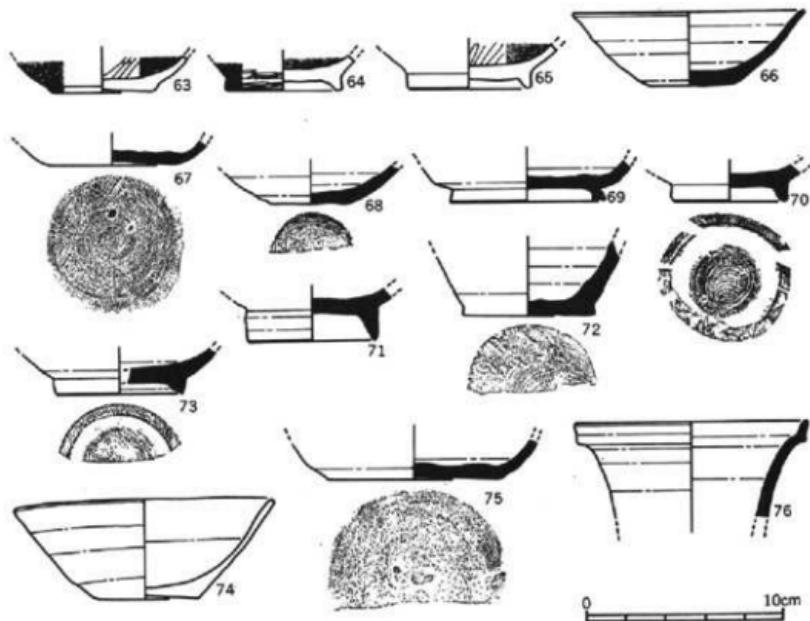
調査区中央の南側に位置する。SM 1は第1次地調査において南側半分が調査され、そ

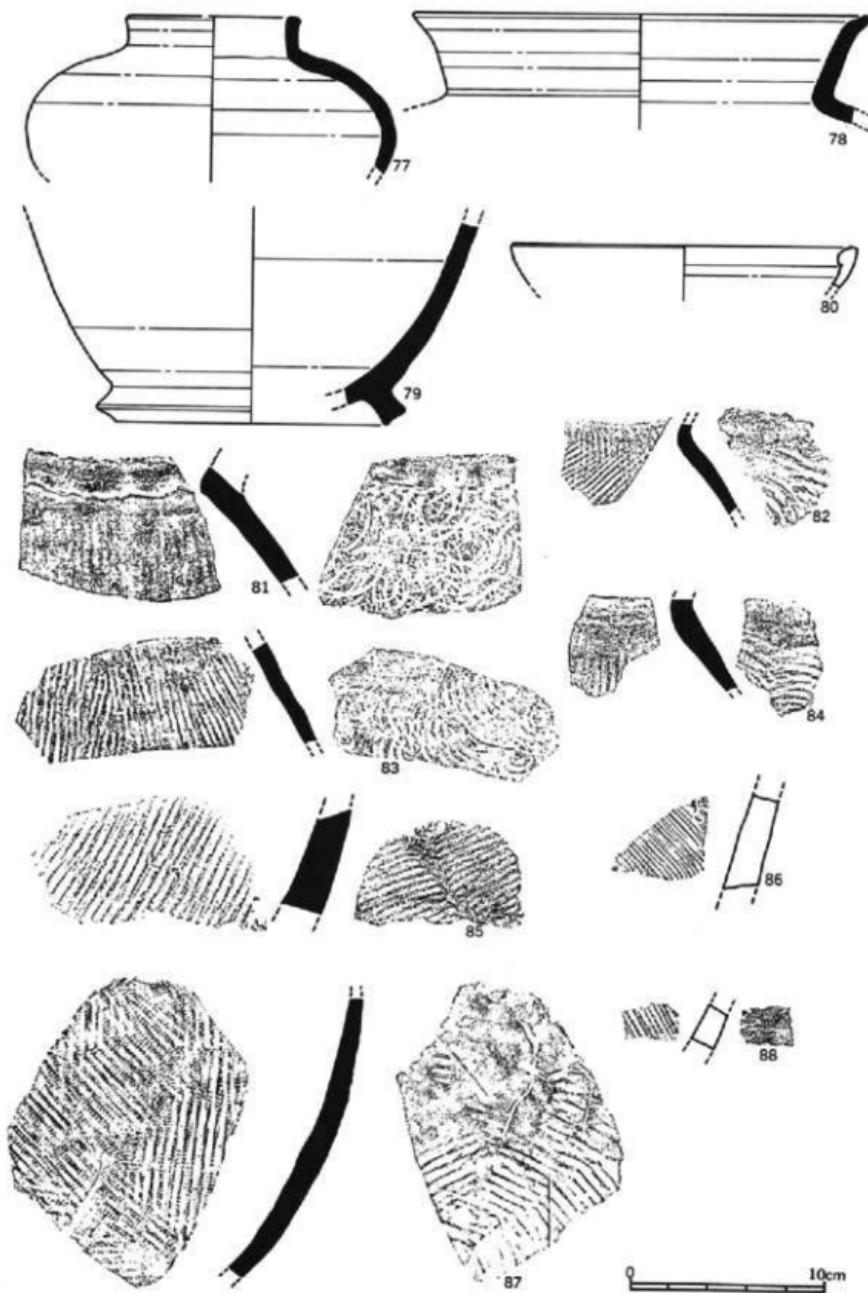
の後削平されており、現存するのは北西側部分が三角形に残るのみである。

SM 1 の全容は方形を呈し、規模は南北 19.2m・東西 17.2m・高さ 1.16m を測るものであった。1 次調査では頂上部に、お堂の礎石と方形の石函の一部（基壇？）が確認され、盛土の下からは中世の土壙が検出されている。今回の調査は、南辺 18m・西辺 11.6m・北辺 11m について調査を実施。盛土の下からは溝が 2 条・ピット 1 基が検出され、これらは出土遺物は少ないが、平安時代の遺構と考えられる。この塚に伴う遺物は検出されていない。塚の盛土は黒褐色シルトである。第 31 図 2 層は旧表土で、最下位の点線はこの塚以外の遺構が確認された地山のレベルである。これを観察すると、塚を除いた部分の地山面が約 30cm も削平されていることがわかる。

### 8 遺構外出土遺物

出土遺物には土師器壊・須恵器壊・高台付壊・壺・壺・蓋・赤焼土器壊・甕がある。ほとんどほのものは小破片である。63～65 は土師器壊で 63・64 は外面黒色処理される。66・73・75・79・81・85・87 は須恵器で、76 は長頸壺、77 は短頸壺である。67・69・75 は底部回転ヘラ切り、他は回転糸切りである。74 は赤焼土器壊で、これが唯一全体を窺えるものであるが内外面剥落が著しい。86・88 は中世陶器の甕洞部片である。





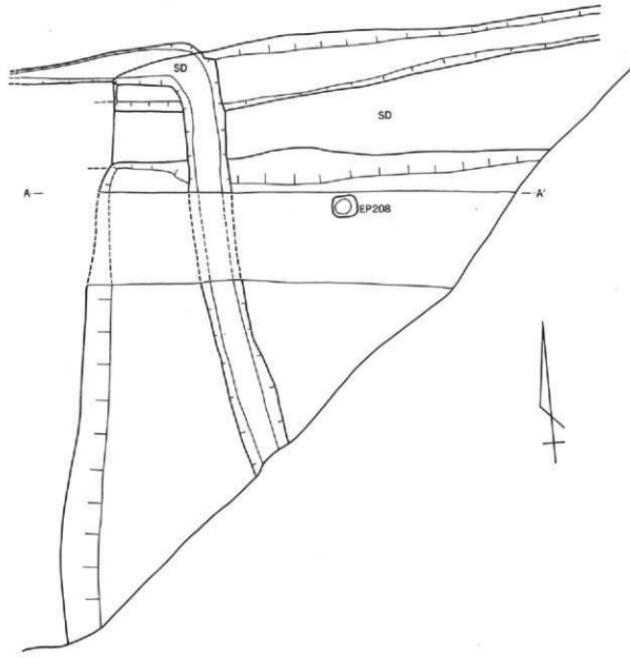


表1 遺物観察表

遺物番号	回版番号	種別	器種	法量(mm)		調整		底部	胎土	色調	焼成	備考	
				口径	標高	底径	外面						
1 26-1	木製品	曲物	径134 厚9									底板、板目	SE1 RW1
2	木製品	箸	長201 厚6.5										PE1
3	木製品	箸	202 7										SE1
4	木製品	箸	223 5										SE1
5	木製品	箸	238 6										SE1
6	木製品	箸	203 6										SE1
7	木製品	箸	241 6										SE1
8 26-2	木製品	箸	194 4										SE1
9 26-2	木製品	箸	195 6										SE1
10 26-2	木製品	箸	174 6										SE1
11 26-2	木製品	箸	159 11										SE1
12 26-3	漆器	硯	13 60									内外面墨漆	SE1 RW1
13 26-4	漆器	环	(140) 51 58	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	細砂、磨砂、多面	淡黄	やや白	口縁～体部約1/2大擦	PBS+RP1	SE4	
14 26-5	漆器	环		ヘラ削り	ナデ		細砂、磨砂、多面	淡黄	やや白	底部付近の破片	RP1	SK97	
15	漆器	环		ロクロ	ロクロ		砂粒混	にれ	灰	体部破片、体部墨漆	SK97		
16 26-5	漆器	毫	格子目風多キ	アテ			粗砂少混	青灰	良	脚部上半片	RP1	SK97	
17 26-7	木製品	曲物	直径192 厚さ6.5 重さ169	132 絆165 重さ31	伴件150 絆165 重さ31							納物	SE41 RW1
18 26-8	木製品	曲物	径133 厚9									底板、板目	SE41 RW1
19 26-9	木製品	曲物	260 7									底板、板目	SE41 RW1
20 26-10	木製品	曲物	246 10									底板、板目、4孔おり	SE41 RW1
21	生漆	环	(130) 45 (50)	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	細砂、磨砂、多面	淡黄褐色	やや白	約1/5處存		SK2	
22 27-1	漆器	毫		格子目風多キ	平行アテ							柄モザイク	良 脚部下半片
23 27-2	漆器	毫		格子目風多キ	平行アテ		磨砂、磨砂、少混	灰	良	脚部下半片、自然給付層		SK2	
24 27-3	漆器	毫?	21 112				ヘチ切り	白色細砂 粗砂少混	灰白	良	底部のみ遺存		SK2
25	石製品	研	45 横30 厚8									装飾品?	SK3 RQ1
26 27-5	砂利	皿	(40) 15 50	ナデ	ナデ	ナデ	砂粒少混	灰白	やや白	約3/4遺存底部外表面剥離		SK4	
27 27-6	陶器	撮鉢		ロクロ	ロクロ 削り跡								SK4
28 27-7	陶器	鶴	(94) 14 70品									内外面墨漆	SK4 RW1
29	砂利	皿	(80) 20 (50)	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	粗砂少混	明褐灰	やや白	約1/5遺存		SK5	
30 27-7-8	木製品	筆	長218 厚5										SK5
31 27-7-8	木製品	箸	233 5.5										SK5
32 27-7-8	木製品	箸	234 4										SK5
33 27-9	石製品	砥石	縦101 横45 厚39									2ヶ所に人面彫刻面	SK4 RQ1
34 28-1	須恵器	高台仰	(110) 53 62	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	白色細砂、粗砂混	灰	良	約1/3遺存		SK77 RW1	
35 28-4	須恵器	皿	(124) 25 62	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	粗砂多混、 粗砂少混	灰	良	全体に凹凸状浮き面		SK77	
36	須恵器	皿	(144) 15	ロクロ	ロクロ		白色細砂、粗砂混	灰白	良	全体に凹凸状浮き面		SK77	
37	須恵器	環	(128) 45 60	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	粗砂少混	浅黄褐色	良	約1/5遺存	RPI1	SK77	
38 28-2	須恵器	環	(129) 56.5 59	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	磨砂、磨砂、多面	淡黄褐色	良	約3/4遺存	RP1	SK77	
39 28-5	須恵器	環	(122) 55 53	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	磨砂、磨砂、多面	淡黄褐色	良	約1/3遺存	RP1	SK77	
40 28-3	須恵器	環	(154) 62 (68)	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	砂粒少混	灰白	良	須恵灰、口縁のみ1/3遺存	RP1	SK77	
41	須恵器	環	(122) 55 (54)	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	粗砂少混	灰白	良	約1/5遺存		SK77	
42 28-12	須恵器	毫	(130) 61	ロクロ	ロクロ		磨砂、磨砂、多面	粗砂	やや白	全体外表面剥離		SK77	
43 28-11	須恵器	毫	140 48	ロクロ	ロクロ		粗砂多混	浅黄褐色	良	口縁部の頸部、約1/4周の遺存	RPI1	SK77	
44 28-10	須恵器	毫	(200) 55	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	磨砂、 粗砂少混	浅黄褐色	良	口縁部外側にスヌ付着	RPI1	SK77	
45 28-8	須恵器	毫	(200) 39	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	磨砂、 粗砂少混	浅黄褐色	良	口縁部有肩鏡片	RP1	SK77	
46 28-9	須恵器	毫	(200) 70	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	磨砂、 粗砂少混	浅黄褐色	良	口縁部有肩鏡片、約1/4遺存	RP1	SK77	
47 28-7	須恵器	毫	(220) 158	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	粗砂少混	漆塗	良	口縁部約1/4遺存、RP1+SK77	RP1+SK77	SK77	
48 28-6	須恵器	毫	71 62	ロクロ	ロクロ	回転 半切り	磨砂、磨砂、多面	粗砂、 粗砂少混	良	体部～底部のみ1/2遺存	RP1	SK77	
49 29-4	須恵器	毫	26 (65)	ロクロ	ロクロ	ヘラ削り ヘラ削り	磨砂、磨砂、多面	粗砂多混 粗砂少混	良	全体外表面墨漆剥離	RP1	SK77	
50 29-3	須恵器	毫		格子目風多キ	アテ							小口部1/3遺存	SK77 RP1

表2 遺物観察表

遺物 番号	回収 番号	種別	器種	法量(mm)			調整		底部	胎土	色調	成形	備考	
				口径	器高	底径	外側	内面						
51		赤陶 土器	甕				クロロ	ハケ 一部ハケ		細砂・多混	淡黄緑	良	調節部上半片	SK78 RP26
52	29-2	土器	甕				クロロ	タクキ		細砂多混	淡橙	良	内面炭化物付着、調節部上半片	SK78 RP26
53	29-5	木製品	箸	長197	厚8									SK40
54	25-5	木製品	箸	154	6									SK40
55	28-13	木製品	甕				平行タクキ	平行アツ		細砂多混	淡橙	良	底部内縫隙減 削り下、底座付近	SK78 RP26
56		木製品	甕				タクキ	一部アツ付 平行アツ		細砂多混	淡黄緑	やや不良	調節下半部片	SK78 RP26-33
57	29-6	木製品	箸	長229	厚6									SK56
58	24-6	木製品	箸	217	4									SK56
59	29-6	木製品	箸	207	5									SK56
60	29-6	木製品	箸	200	5									SK56
61	29-6	木製品	箸	201	6									SK56
62	29-6	木製品	箸	200	5									SK56
63		土器	甕	16	54	ヘラミガキ ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラミガキ	内縫隙 削り下	白色微砂、少混	明青灰	良	底部の約1/2遺存、開口	G4-49	
64		土器	高台付甕	16	(60)	ヘラミガキ ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラミガキ	内縫隙 削り下	微砂少混	暗灰	良	底部1/2遺存、開口		
65		土器	高台付甕	22.5	64	クロロ	ヘラミガキ ヘラミガキ	内縫隙 削り下	細砂・白色細砂混	灰白	不良	内面の壊滅層らしい 底然のひき付生痕	G7-50	
66		質恵器	甕	(120)	37	(40)	クロロ	クロロ	微砂少混	灰白	良	約1/5遺存	G2-51	
67		質恵器	甕	12	66	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	白色細砂、細砂混	青灰	良	底部破片	G6-48	
68		質恵器	甕	20	(40)	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	砂粒混	灰色	やや不良	底部のみ約1/2遺存		
69		質恵器	高台付甕	20	80	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	細砂少混、細砂多	灰	良	底部1/3遺存	G7-50	
70		質恵器	高台付甕	18	56	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	細砂少混	明青灰	良	底部のみ道存高台一部欠損 RP3		
71		質恵器	高台付甕	24	65	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	細砂・多混	青灰	良	底部のみ道存	G7-49	
72	30-3	質恵器	甕・壺	38	68	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	白色粗砂、少混	灰白	良	底部のみ破片	G6-48	
73		質恵器	高台付甕	22	65	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	砂粒少混	褐色	良	底部1/2破片	G4-47	
74		土器	甕	(135)	50	56	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	難	砂粒混	にぼい 青灰	底部約1/4欠損 底部内縫隙剥離	RP2
75		質恵器	甕	19	(90)	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	半透明、細砂多混	灰	良	底部破片約1/2遺存		
76	30-5	質恵器	甕	(120)	50	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	微砂少混	灰	良	口縫隙破片	G6-31	
77	30-1	質恵器	細頭甕	(100)	80	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	粗砂微砂混	片・明青灰 灰	良	口縫隙約1/3弱	G6-48	
78	30-4	質恵器	甕	(235)	55	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	難	砂粒混	明青灰	良	口縫隙のみ破片	G7-49
79	30-2	質恵器	甕	102	(140)	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	白色粗砂・粗砂混	灰白	良	全体部破片	G4-49 G2-52	
80		土器	鉢	(180)	23	クロロ	クロロ	内縫隙 削り下	細砂少混	青灰	良	口縫隙破片 鉢形土器か?	G5-63	
81	30-10	質恵器	甕			平行アツ	同心円 内縫隙	内縫隙 削り下	細砂少混	青灰	良		G4-49	
82		質恵器	甕			平行アツ	内縫隙 削り下	内縫隙 削り下	細砂混	灰	良	底部片	G5-54	
83		質恵器	甕			平行タクキ	青青波		細砂少混	灰	良	底部片	G7-49	
84		質恵器	甕			上部ハグ 下部平行タクキ	青青波	内縫隙 削り下	細砂	灰白	良	底部片	G4-55	
85	30-11	質恵器	甕			平行タクキ	平行アツ	内縫隙 削り下	粗砂・多混	灰白	良		G7-49	
86		質恵器	甕			タクキ	ナダ			青灰	良	調節部、質恵器系	G7-49	
87	30-12	質恵器	甕			格子目風 フクモ	平行アツ	内縫隙 削り下	粗砂少混	にぼい 青色混	良			
88		土器	甕			タクキ	ナダ		微砂混	灰	良		G5-63	

## V まとめ

今回の調査は昭和63年度県道酒田遊佐線道路改良事業に係る緊急発掘調査である。調査期間は、昭和63年5月23日～同年7月1日の延29日間である。発掘調査を行った総面積は1636m<sup>2</sup>である。この地域では昭和61年7月9日～同年9月26日までの延49日間、昭和61年度農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）に係る上曾根遺跡の緊急発掘調査が実施された。これを第1次調査とする。この調査では、掘立柱建物跡3棟を含む柱穴190基・土壙26基・溝跡13条・井戸跡1基・塹3基が確認された。出土遺物は平安時代・中世・近世以降のものが検出されており出土数は平安時代のものが圧倒的に多く、全体の97%が須恵器・赤焼土器である。今回の調査の成果は次のとおりである。

検出された遺構は掘立柱建物跡2棟・井戸跡5基・土壙8基・溝跡2条・柱穴及びピット41基を数える。掘立柱建物跡については、遺構からの遺物が少なく明確な時期は不明であるが、両棟が1mほどの距離で隣接し、主軸方向が同じであることより、同時期の建物跡である可能性が高い。しかも、両者の規模及び位置関係より、SB1がSB2の付属する建物であったとも考えられる。これら建物跡はSB2内のEP10・EB11・EB35からの若干の出土遺物より平安時代の可能性もあるが、この遺物が僅少であるため、明確ではない。またSB1はSK2と重複するが、両者とも遺物が非常に少なく、新旧関係は不明である。

井戸跡は5基確認され、それぞれの内部より井戸枠材等が検出されている。SE7・SE41・SE97は縦板を横桟で支える構造のもので、特にSE7・97では井戸枠組みが良好な状態で遺存していた。これら井戸跡は出土遺物より、SE97は平安時代、SE41は曲物の年輪年代測定より13C第4四半期以降と考えられ、SE1・7・8は明確な時期は不明である。

土壙は、平安時代・中世・時期不明の3つに分けられる。SK78は平安時代9C末～10C前半と考えられる。SK2・SK3は出土遺物が少量であるが、それらの時期より平安時代の可能性がある。SK4・SK5は、かわらけ等を出土することより中世、と考えられるがSK40・SK56は明確な時期不明。

柱穴は、掘立柱建物跡も含め、縦板を有するものが多く検出されているのが特徴である。このような縦板をもつ柱穴は本遺跡より1.9km北に位置する庭田遺跡において7棟の建物跡より多数検出され、また、1.2km北東に位置する安田遺跡からは2棟の建物跡より検出されている。

塹は、平安時代の溝跡の上に構築されており、出土遺物は未検出であるが、それ以降の

時期であろう。この塚の断面観察より調査区の地表面が塚が構築された当時より約70cmも削平されていることが明らかになった。このようなことより、かなりの遺構が削平され、消滅してしまっていると推測される。

出土遺物には、土師器・須恵器・赤焼土器・かわらけ・中世陶器・漆器・木製品・石製品がある。出土数は、細片まで含めると赤焼土器が圧倒的に多い。須恵器・赤焼土器の年代は9C末~10C前半と考えられる。かわらけはSK4・SK5より2点出土するのみである。木製品では箸が圧倒的に多く、検出した遺構もSE1・7・8・SK5・40・56と多数より出土している。特にSK5内からは84本もの箸がまとめて出土しており一括して廃棄されたものと考えられる。またSE41内出土の柄杓は国立奈良文化財研究所の光谷拓実氏の年輪年代測定によると、1003年、同遺構内出土の底板は1276年という年代が出ている。石製品ではSK5より出土した人面線刻画が描かれた砥石が注目される。これには2つの人面が描かれており、1つは写実的に、もう1つはかなり小さく、径7mmぐらいのスタンプ状に線刻されたものである。このような砥石に人面が線刻されるものは県内では初例と考えられる。この土壙内よりは、先述したように多数の箸と、かわらけの小片が1点出土しており、この砥石も中世のものと考えられるが、出土位置が、遺構確認面より10cmほど壁際であることから流れ込んだ可能性もある。また、SK3内からは彫刻が施された5角形の石製装飾品が出土している。同土壙内より出土した須恵器等より平安時代とも考えられるが、遺物が僅少のため明確ではない。

以上、今回の調査区内で検出された遺構は、ほとんどが平安時代~中世と考えられるが、出土遺物が僅少なものが多く、時期の明確な遺構が少ない。しかし、これらの中で箸を出土した遺構は、共通した覆土(黒色シルト)を呈するもので、同時期の所産とも推測される。このような箸は明確に平安時代の遺構と考えられるSK78・SE97からは全く出土しておらず、箸を出土した遺構が中世の時期である可能性を有する。また、第1次調査においても中世の遺構は黒色粘土の覆土を呈することがこの時期の特徴とされている。このような意味では、今回検出されたSB1・SB2建物跡の柱痕の覆土も黒色を呈するものであり、さらにこれらが第1次調査で中世の所産とされた建物跡(SB1)と、主軸方向が同じであること等より、今回検出されたSB1・SB2建物跡も中世の所産である可能性を持つと考えられる。

#### 参考文献

- |                |               |                    |
|----------------|---------------|--------------------|
| 山形県教育委員会(1987) | 『上曾根跡発掘調査報告書』 | 山形県埋蔵文化財調査報告書第116集 |
| 山形県教育委員会(1982) | 『安田遺跡発掘調査報告書』 | 山形県埋蔵文化財調査報告書第56集  |
| 山形県教育委員会(1983) | 『庭田遺跡発掘調査報告書』 | 山形県埋蔵文化財調査報告書第65集  |
| 山形県教育委員会(1987) | 『南興野発掘調査報告書』  | 山形県埋蔵文化財調査報告書第114集 |

# 図 版



遺跡近景（北より）



遺跡近景（北より）

図版2



A調査区（北より）



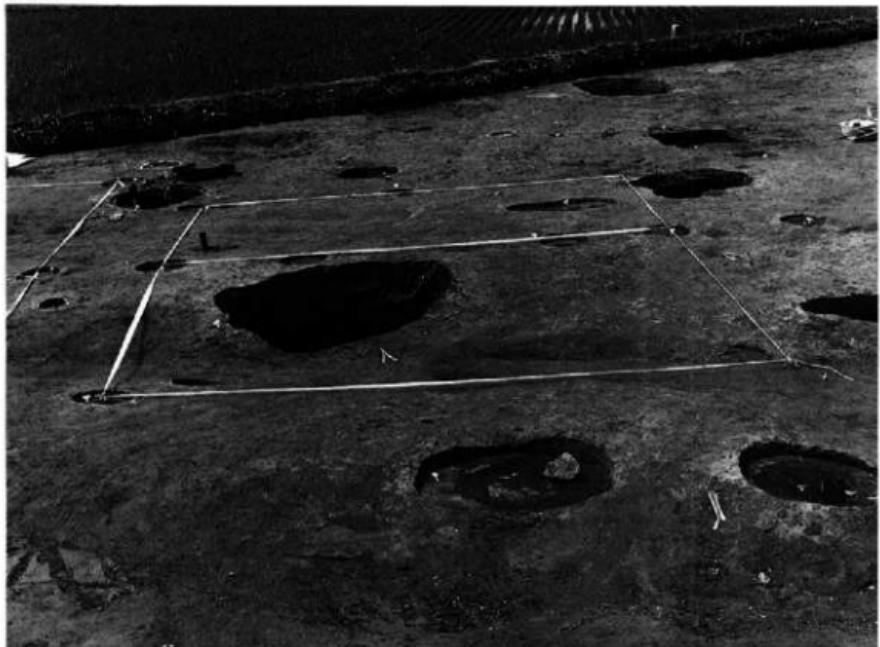
B調査区（北より）



調査風景（南西より）



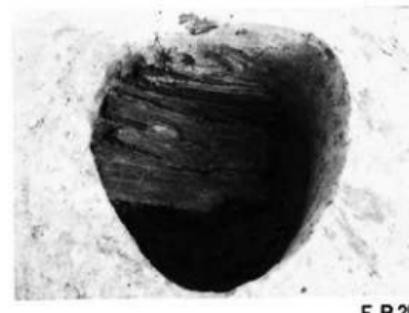
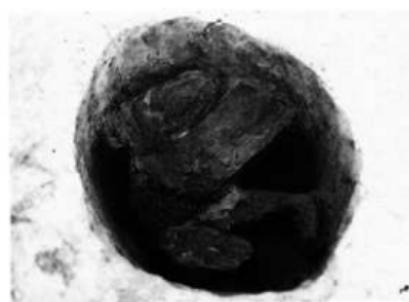
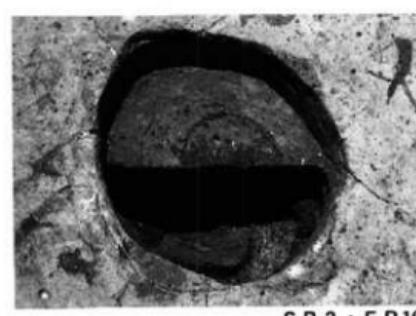
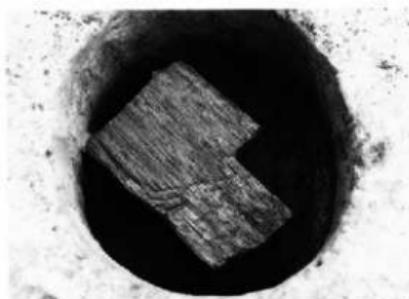
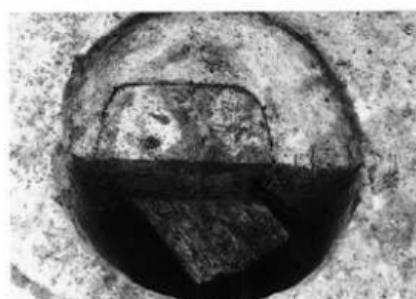
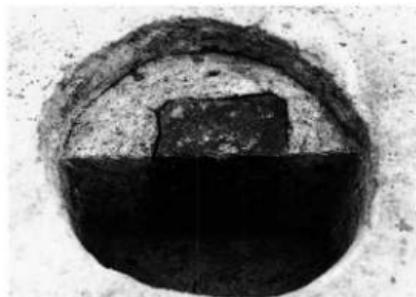
B区遺構検出状況（南西より）



SB 1 建物跡（南より）



SB 2 建物跡（南より）





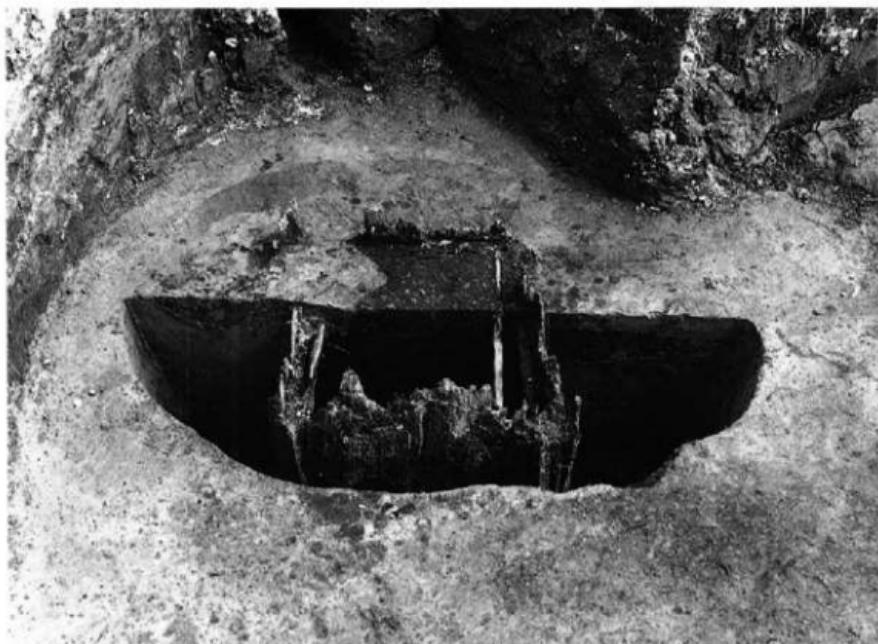
SE 1 井戸跡（南西より）



SE 1 井戸跡出土遺物



S E 7 井戸跡 (北より)



S E 7 井戸跡断面



S E 7 井戸跡 (北より)



S E 8 井戸跡断面 (南西より)



SE 8 井戸跡（南西より）



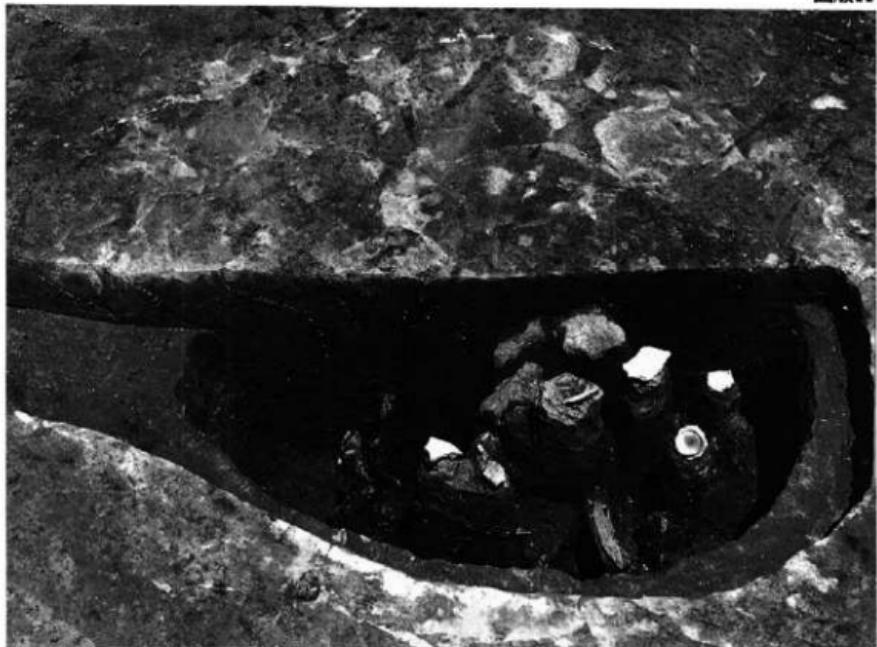
SE 41 井戸跡上面（南より）



S E 41井戸跡（南より）



S E 41井戸跡出土遺物



SE 97井戸跡（南西より）



SE 97井戸跡（南西より）



S E 97井戸跡（南西より）



S K 2 土壙（南より）



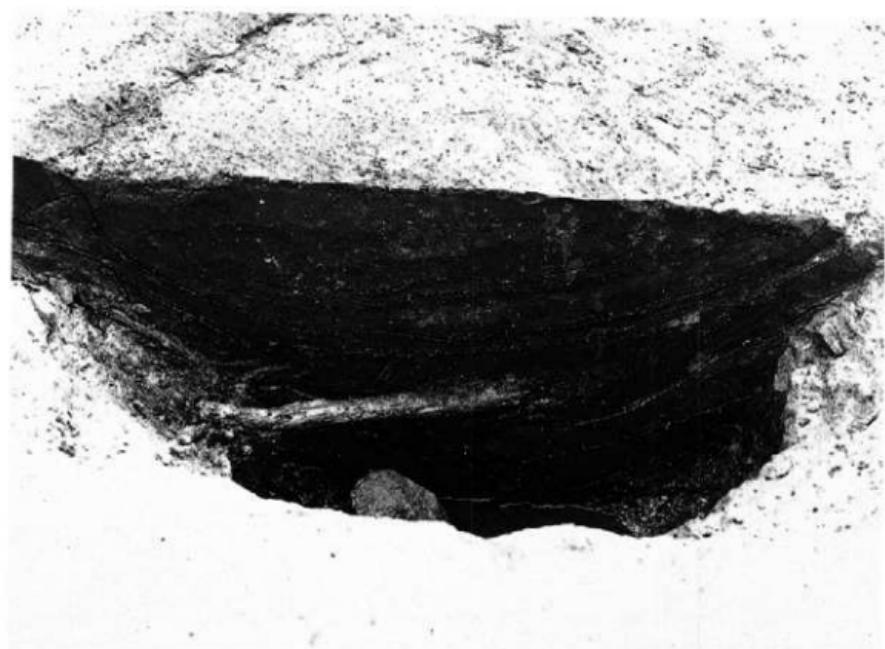
S K 2 土壌 (南より)



S K 3 土壌 (南より)



S K 3 土壌出土遺物



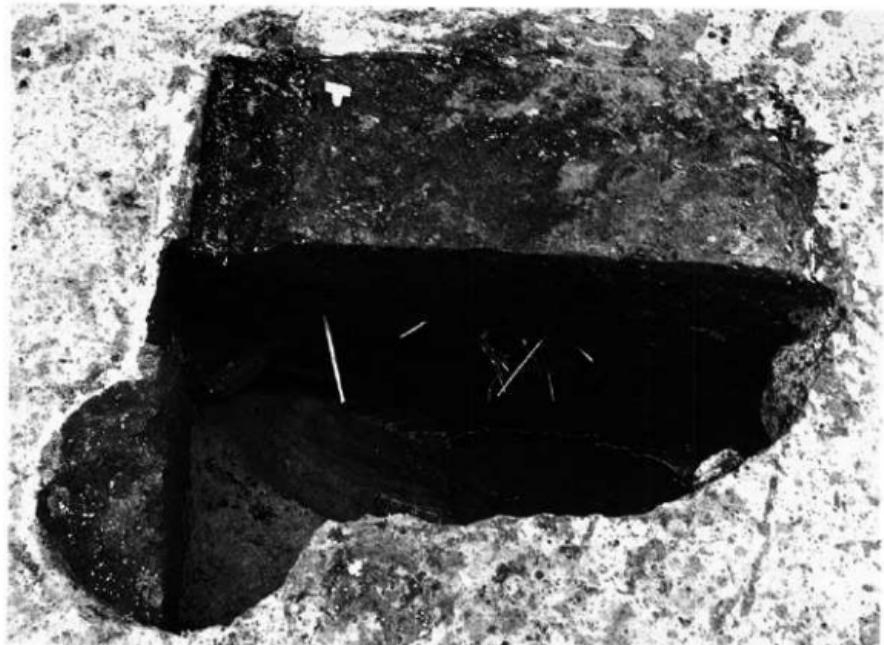
S K 4 土壌断面 (南西より)



SK 4 土壌 (南西より)



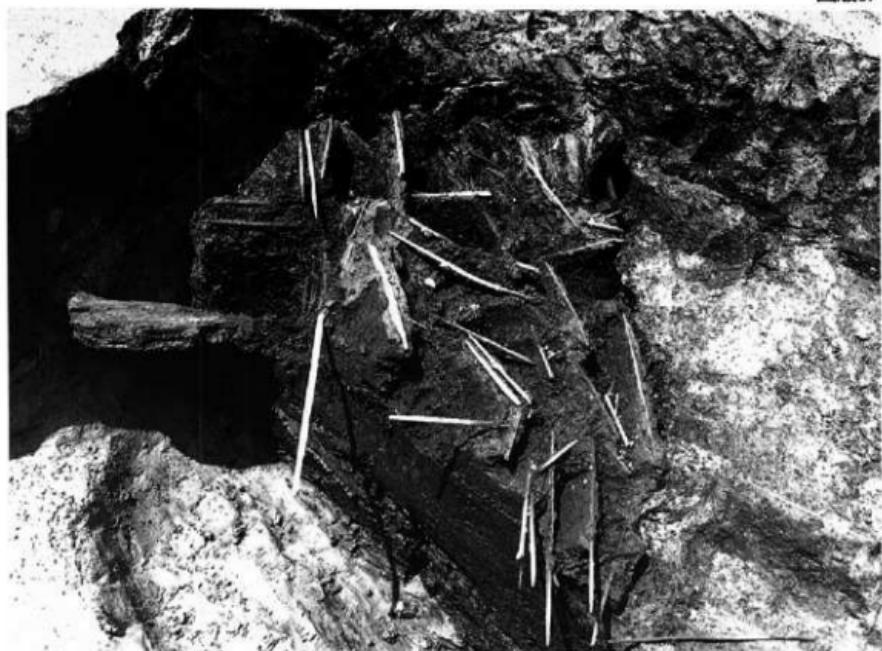
SK 4 土壌



SK 5 土壌断面（南西より）



SK 5 土壌（南西より）



S K 5 土壤著出土状態



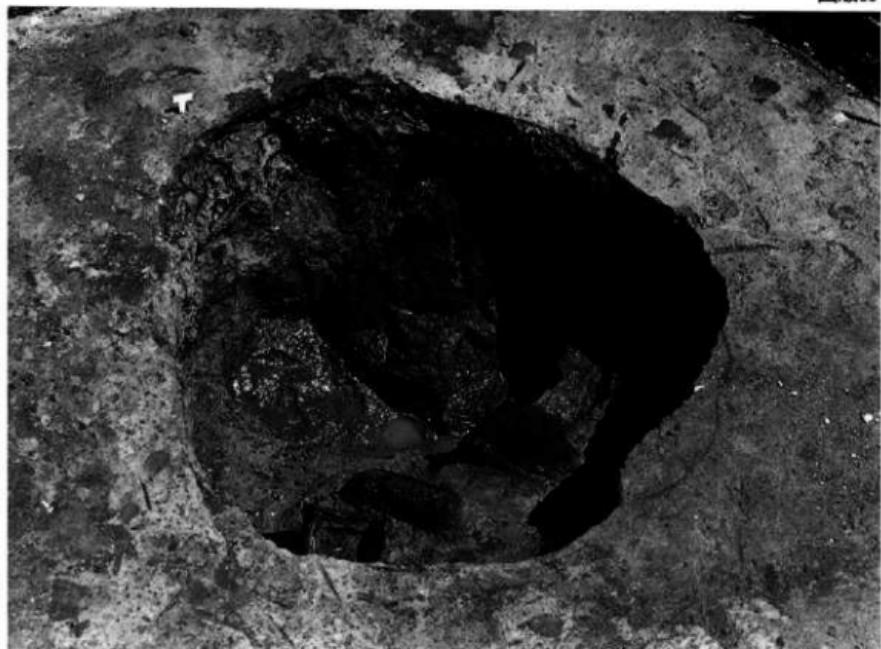
S K 5 土壤磁石出土状態



S K37土壤 (南西より)



S K56土壤断面 (北より)



S K 56土壤 (北より)



S K 78上層断面 (南西より)



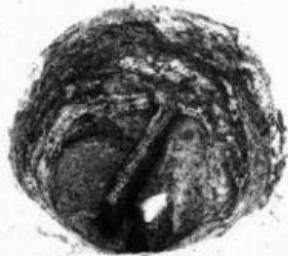
S K 78上層（南西より）



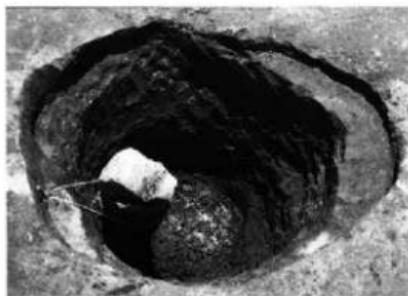
S K 78下層断面（南西より）



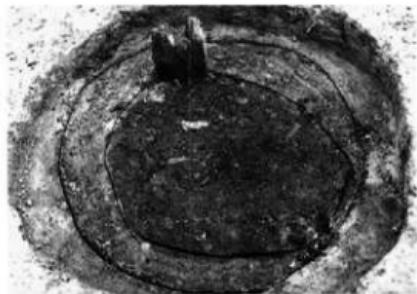
SK 78完掘状態（南西より）



E P 57



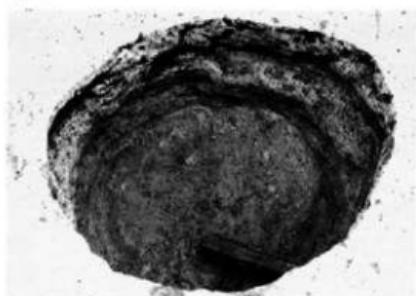
E P 30



E P 32



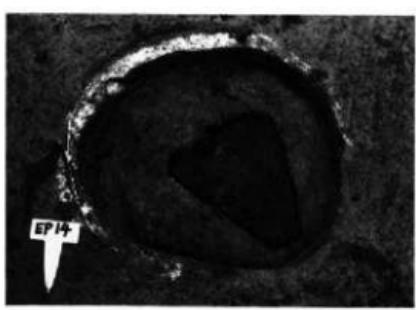
E P 32



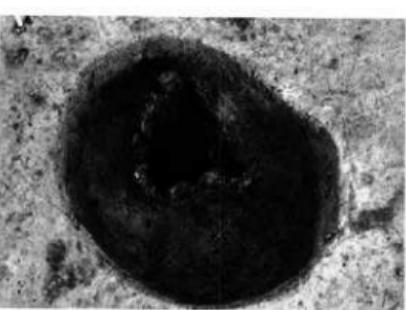
E P 58



E P 59



E P 14



E P 14



SB 2内・E P 10



E P 10



E P 100



E P 101



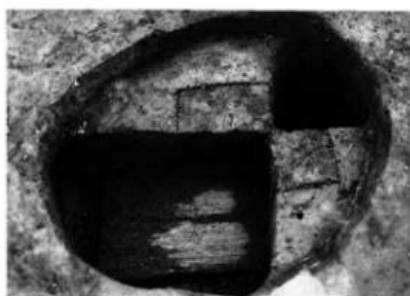
EP 104



EP 48



SB 2・EP13



SB 2・EP18



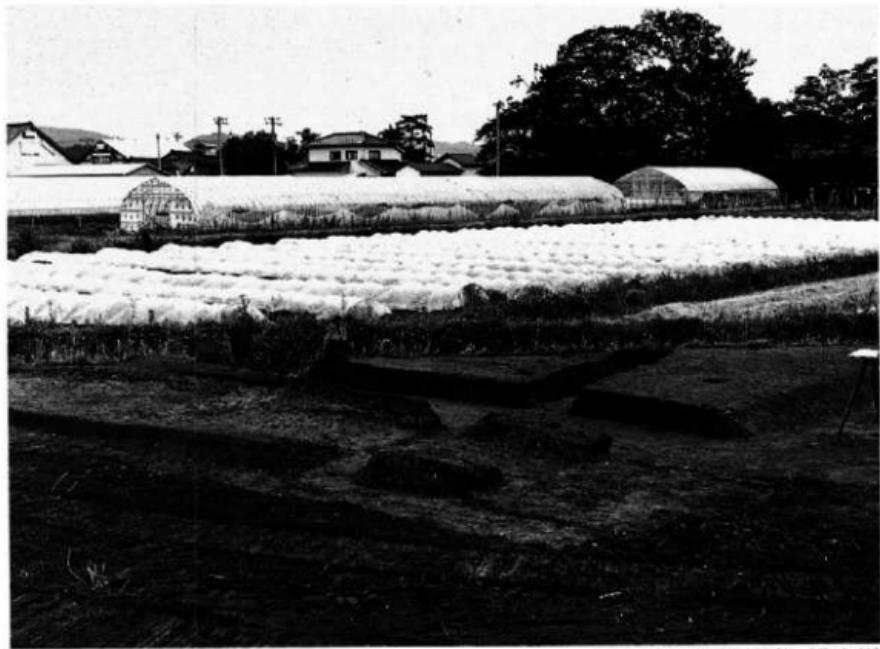
SM 1 塚断面（南より）



SM 1 塚下層遺構検出状態（南西より）



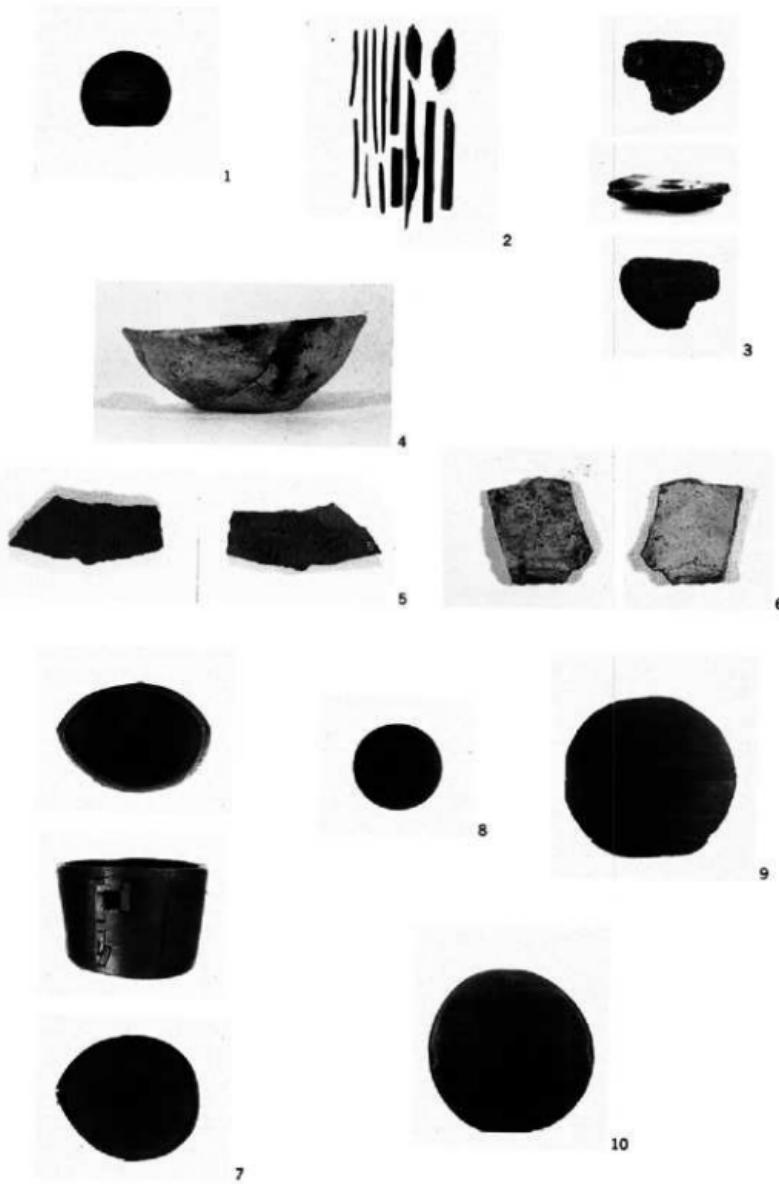
SM 1 塚下層溝検出状態（南西より）



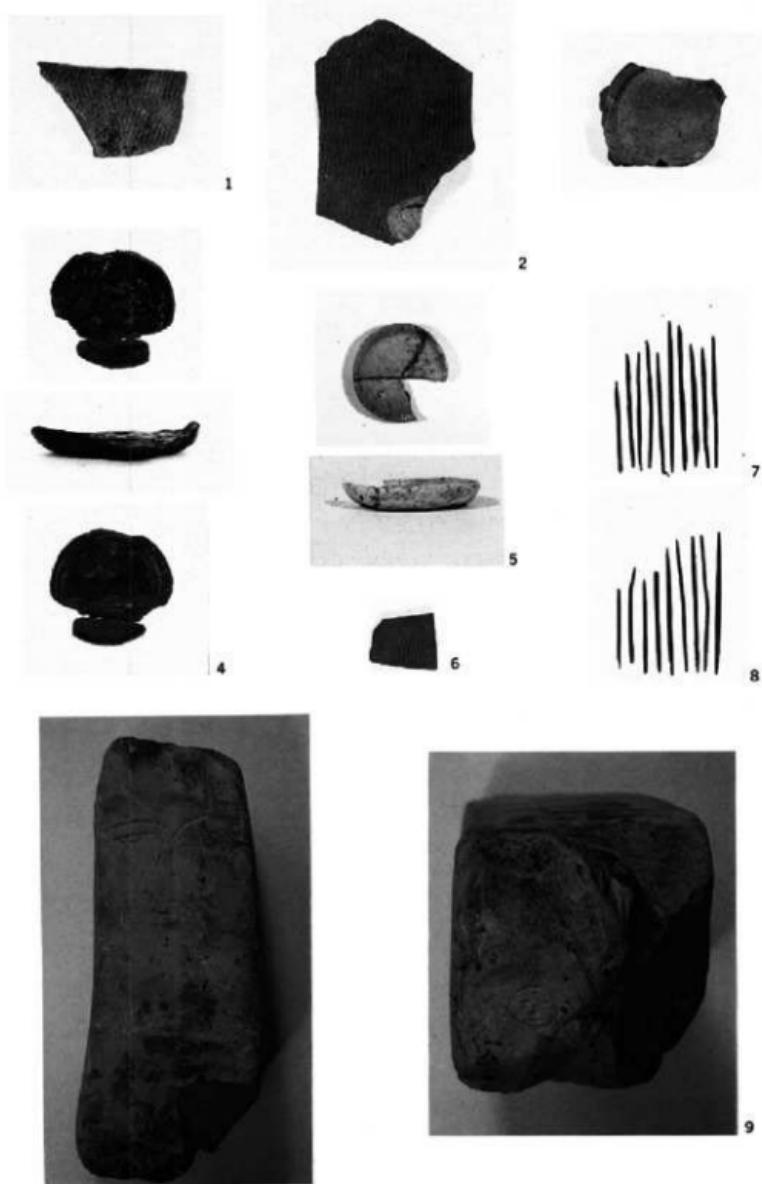
S M 1 塚下層完掘状態（北より）



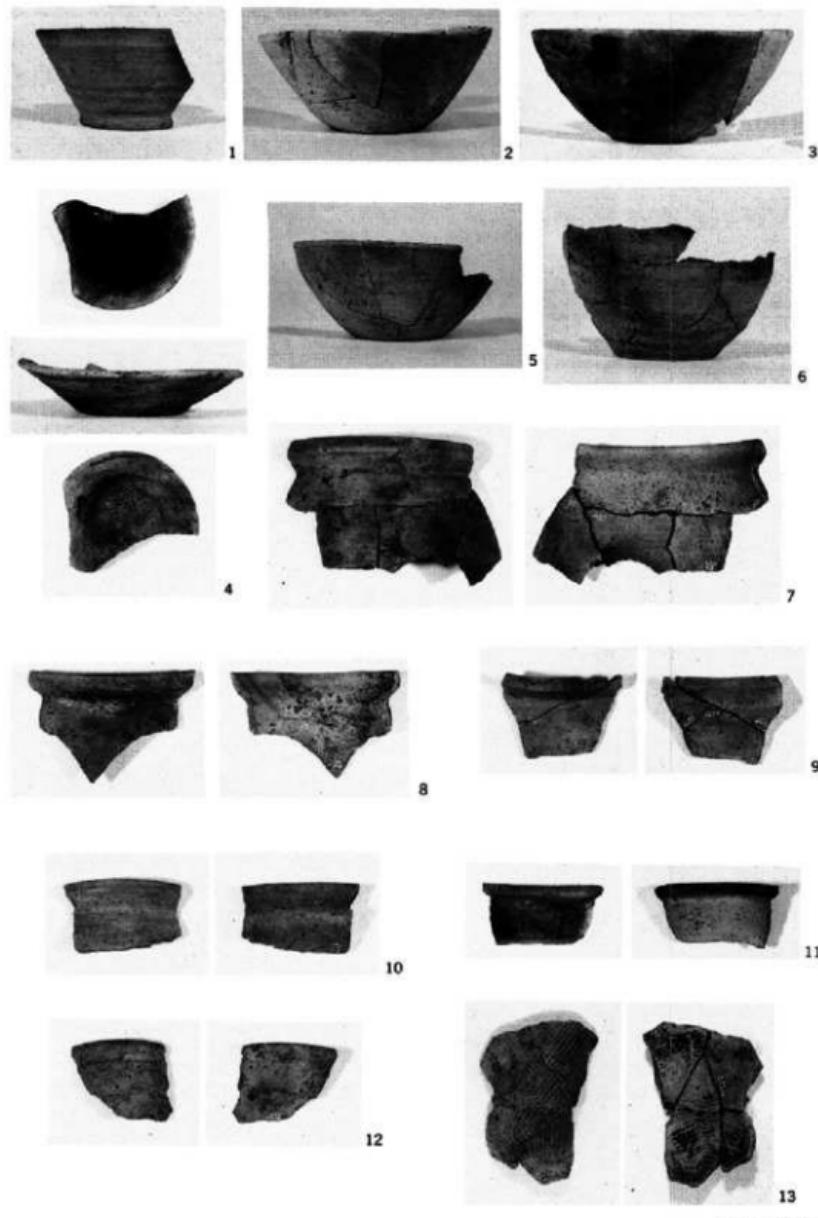
A 調査区（南西より）

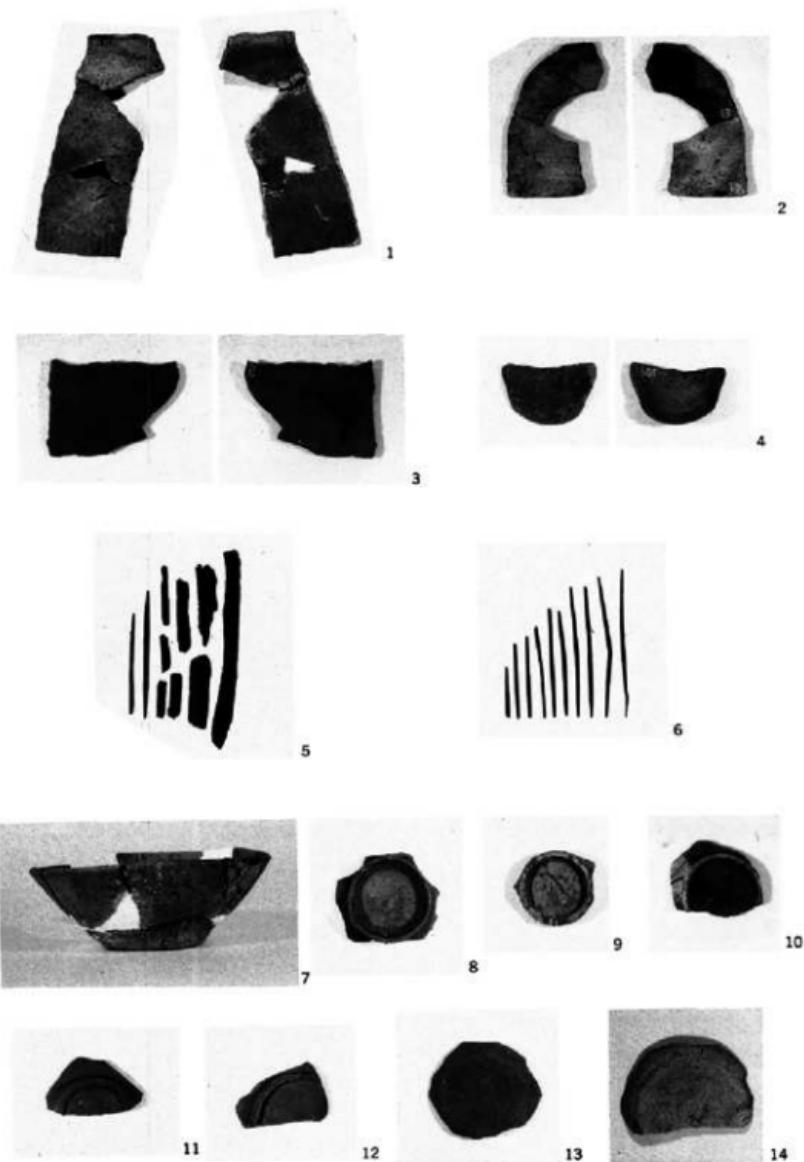


出土遺物(1)

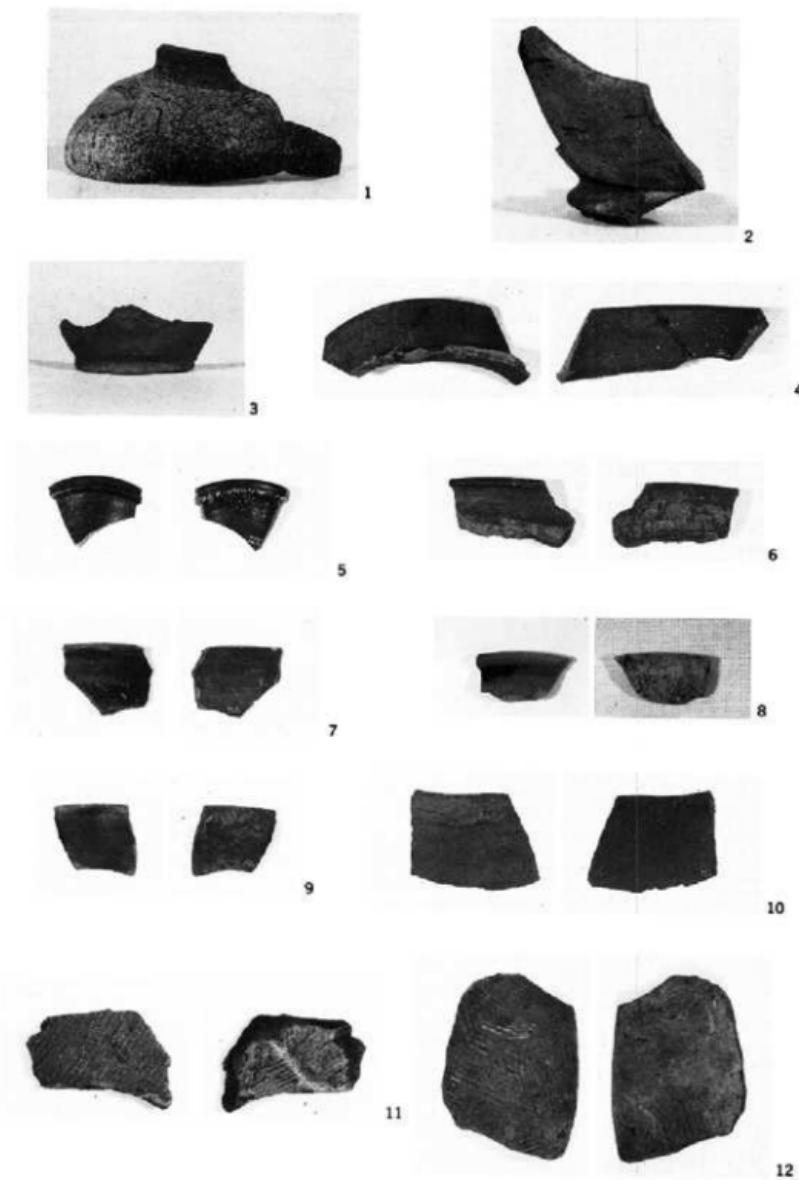


出土遺物(2)





出土遺物(4)



---

山形県埋蔵文化財調査報告第147集

上曾根遺跡  
第2次発掘調査報告書

平成元年3月20日 印刷  
平成元年3月25日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 緑大風印刷

---